



「ドイツ民謡文庫」(Deutsches Volkslied Archiv,
Jreiburg in Breisgau)とその課題(1):
ドイツ民謡学における,民謡蒐集・資料整備・出版活
動の面からの一事例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂西, 八郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3319

「ドイツ民謡文庫」(Deutsches Volksliedarchiv, Freiburg in Breisgau)¹⁾ とその課題 (1)

——ドイツ民謡学²⁾ における、民謡蒐集・資料整備・
出版活動の面からの一事例³⁾——

坂 西 八 郎

The DVA and its problem

Hachiro Sakanishi

Abstract

Since the **DVA** (**Deutsches Volksliedarchiv**) was founded, in 1914, under the active leadership of J. Meier, whose whole time and energy was contributed to the **DVA** for a half century, and the dynamic influence of the works of the late Erk, Boehme, Germany Folksong Study has continued its work based on the positive method.

A large amount of the work of the **DVA** was and is divided into two parts: the first, the exploration of a traditional process of each folksong and ballad is

-
- 1) Deutsches Volksliedarchiv Freiburg in Breisgau——以下 **DVA** と略す。
 - 2) ここでは、「ドイツにおける民謡学」の意ではなく、「ドイツ民謡の学」の意である。従って、本「事例」は、「ドイツ民謡の学」を追求している。オーストリア、オランダ、スイス、デンマーク、ハンガリー、チェコ、ポーランド等も含めた広領域における一つの「事例」。
 - 3) **DVA** の簡単な活動報告には、(イ) ヴァルター・ヴィオラ (Walter Wiora) の『ドイツ民謡研究の現状』(《Zur Lage der deutschen Volksliedforschung. Das Erbe John Meiers und die weiterführende Entwicklung. In: Zeitschrift für deutsche Philologie 73 (1954), S. 204 ff.》)。(ロ) ロルフ・ヴィルヘルム・ブレトニヒ (Rolf Wilhelm Brednich) の『ドイツ民謡文庫創立 50 周年に寄せて』(《Zum 50 jährigen Bestehen des Deutschen Volksliedarchivs in Freiburg i. Br. In: N. Blätter für Volkskunde, Bd. 55, S. 310-318, 1964》)。(ハ) エーリヒ・ゼーマン (Erich Seemann) の『ドイツ民謡文庫とその諸活動』(《Das Deutsche Volksliedarchiv und seine Arbeiten. Volkskunde-Kongreß Nürnberg, 1958. Vorträge und Berichte. Beiheft zur Zeitschrift für Volkskunde, 1959, Stuttgart 1959, S. 62-72》), 等がある。本「事例」はそれらに依拠してゐる。

imposed, in which the birth, the development and the probable death of the folk-song are seen, and in which also the long life-evidence of the folksong is continued for about a thousand years, and a young folksong might possibly no longer die; the second, taking out from the first study, as a necessity, the field of “Comparable Folksong Study” is opened in order to make clear the widely spread processes of the Folksong-Tradition, which are scattered as far as North and South America.

Without argument this attitude of study is carried on by the strict positive method, and they who work in the **DVA** have been so objective in the concrete collection of folksongs and in the filing and publication of data that there has never been any dealing with subjective data. The character of Meier's school is based on this point.

The **DVA** stands today on the railway laid by J. Meier. The present problem of the **DVA** is also fixed with the work J. Meier began. Moreover, because of this very difficult problem there will have to be twenty or thirty more years to restudy and republish the great work of Erk-Boehme by the Meier method.

The purpose of this paper is to view the activities of the **DVA** in the light of Folksong-Gathering, Data-Filing and Editing.

1. ドイツ民謡文庫——**DVA** の設立と其の後の蒐集

DVA は 1914 年にジョン・マイアー (John Meier)⁴⁾ により設立された。この設立は、ほぼ 3 つのマイアーの意図——(イ) 今までなかったドイツ民謡の包括的で学問的な著作というものを公刊する。(ロ) 民俗学的蒐集活動の諸成果のうち、民謡に関する部分だけを集積することのできる、中央研究所たらしめる。(ハ) 民謡研究に対して、民俗学的諸研究の重要構成部分としての資格を与える、という意図によりなされた。その結果 **DVA** 設立後まもなく、ドイツの民謡研究はヨーロッパ諸国における自国の民謡研究⁵⁾ におくれない水準に達することにもなった。

4) ジョン・マイアー (John Meier 1864-1953) の活動とその意義については、エーリヒ・ゼーマン (Erich Seemann) の、(イ) 『ジョン・マイアー』(《John Meier. Ein Leben im Dienste am Volkslied.—In. Die Musikforschung, VI. Jahrgang, 1953/Heft 4》)。(ロ) 『ジョン・マイアー』(《John Meier (1864-1953). Zeitschrift für Volkskunde, 50 (1953), S. 279-302》)。(ハ) 『ジョン・マイアーを記念して』(《John Meier zum Gedächtnis. Schweizer Archiv für Volkskunde, 49 (1953), S. 212-218》)。(ニ) 『ジョン・マイアー』(《John Meier (1864-1953). Sein Leben, Forschen und Wirken. Freiburg in Breisgau, 1954, 8°, 20 S., Tafel (=Freiburger Universitätsreden. N. F., Heft 17)》)。(ホ) 『ジョン・マイアーと民謡研

究」(『John Meiers Verdienste und das deutsche Volkslied. Ein Rückblick zum 70 Geburtstag des Forschers. Deutsche Volkslied, 36 (1934), S. 69-71』) 等。「ジョン・マイアー学派」(John Meierische Schule)——DVN はこの「学派」に属する——の「民謡概念史」(Die Geschichte des Volksliedbegriffes) 上の立場については、ライムント・ツォーダー (Raimund Zoder) の『オーストリアにおける民謡, 民俗舞踏, 民俗慣習』(『Volkslied. Volkstanz und Volksbrauch in Österreich, 1950, S. 9』) 所載。

- 5) 例えばオーストリアにおける民謡研究史については、カール・ルークマイヤー (Karl Lugsauer) が、『オーストリア民謡研究年報, 第3巻』(『Jahrbuch des Österreichischen Volksliedwerkes, Bd. III, 1954』) に述べているが、それによると、ヨーゼフ・ボンメル (Josef Bonner) は当時のオーストリア教育相リッター・フォン・ハルテル (Ritter von Hartel) の協力のもとに、1904年、「オーストリア民謡振興会」(Das Österreichische Volkslied Unternehmen) を創設したが、この教育相はドイツ文学者と音楽学者を招集し、費用の裏付けをし、専門上の指導をヨーゼフ・ボンメルに依託している。この「民謡振興会」は、実質的には「民謡振興本部」ともいうべき政府機関であり、現在は「連邦教育省付属オーストリア民謡研究所」(Österreichisches Volksliedwerk beim Bundesministerium für Unterricht) として活動している。ジョン・マイアーは、この「民謡振興本部」から出版される活動成果を、羨望したかもしれない。

フランスでは、小泉文夫の『日本伝統音楽の研究, 28頁』によれば、》シャトーブリアン (François-René Vicomte de Chateaubriand 1763-1848), バルザック (Honoré de Balzac 1799-1850), ジョルジュ・サンド (Georges Sand 1804-1876) といった文筆家がまず民謡を注目し始める。そして、英国と同様世紀の変わりめ頃からにわかに熱心にメロディーの蒐集と研究が行なわれた。ジュリアン・ティエルソ (Jean Baptiste Julien Tiersot 1857-1936) 『音楽百科辞典』(『Encyclopedie de la Musique』), モーリス・エマニエル (Maurice Emmanuel), J・B・ヴェツケルラン等がその指導者であった。と述べている。

イギリスでは、『同書, 27頁』に、》1898年に「英国民謡協会」(English Folk Song Society) が設立されたのを初めとし、アイルランドや、ウェールズにも同様の協会が設立されて、その研究の地歩が固まった。……それらの中で、もっともわれわれの興味をひく研究を行なったのは、セシル・シャープ (Cecil James Sharp 1859-1924) 『英国民謡』(『English Folk Song, Some Conclusions, 1936』), 『南アパラチア山岳地方の英国民謡』(『English Folk Songs from the Southern Appalachian Mountains, 1932』) である。シャープはとくに「バラード」(ballad) の研究を中心に行ない、そのもっとも純粋な形を英国にはなく、移住者と共に大西洋を渡った米國に発見した。とある。

アメリカにおける民謡研究は、バートランド・H・ブロンソン (Bertrand Harris Bronson, Berkeley, California) の『合衆國における民謡, 1910年~1960年』(『Folk-Song in the United States, 1910-1960. In: Jahrbuch für Volksliedforschung IX, Jahrg. S. 1-11』), また上記論文の脚注にも指示されているが、ウェイランド・D・ハンド (Wayland D. Hand) の『北アメリカ民俗学会: 概観』(『North American Folklore Societies: A Survey. In: Journal of American Folklore, 1943, pp.

設立とともにジョン・マイアーが意欲的に第一に着手した仕事は、蒐集活動の組織化であった^{6,7)}。彼が着目したのは、50~60年来全ドイツに渡って、極めて活潑にはあるが自然発生的に生じてきていた、地方の民謡保存会や地方民俗学協会の類であって、彼はこれ等に依拠しつつ、諸地方に「民謡蒐集所」(Volksliedjammeistelle)の組織——「地方文庫」(Landesarchiv)を設立した。これは、その後2,3年内に約30組織を数えるに至った。この「地方文庫」は、殆ど全ドイツ語圏を包括し、バルカンからレニングラードまでの僅かなドイツ的要素の散在地域にも目をくばりつつ⁸⁾、計画的に地方地方の民謡の宝庫を追求した。その成果は、整理・修復・研究等のためにフライブルクのセンター、即ち *DM* に送られた。

161-191)), 『同:補遺』(《North American Folklore Societies: A Supplement. In: Journal of American Folklore, 1946, pp. 477-494》)によれば、「アメリカ民俗学会」(American Folklore Society)が設立されたのは1888年であり、それと同時に同学会の第5部門「英国とスコットランドのポピュラーなバラード部」(Department of English and Scottish Popular Ballads)が設置された。これは前述のセシル・シャープと同等な業績を残した、フランシス・J・チャイルド(Francis James Child)の指導に委ねられた。各州に支部が設立されたので、アメリカにおける組織的な民謡研究はこの頃既に着手されたのであって、ドイツ、オーストリアよりも進んでいた。

東欧諸国については註8)。

- 6) 蒐集事業のドイツにおける先例は、これを史学にみるができる。「ドイツ中世史研究協会」(Die Gesellschaft für die ältere deutsche Geschichtskunde)は、各連邦に支部を設置して組織的に歴史的資料を蒐集しようと考えた。このドイツ民族の「統一の民族としての証拠」を集める緊急の必要性は、1824年に「モヌメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ」(Die Monumenta Germaniae Historica)事業として、当初は政府の黙認のもとに(後には援助したが)発足した。もっとも、プロイセン政府は、政府の政治方針に合致しない「資料」の発見とその公表を絶対に好まなかったけれども。これに対して、民謡学においては、組織的蒐集は約100年遅れたわけである。それは、あの強力な「プロイセン学派」(*Preussische Schule*)の勃興状況にみるができるし、また国家・民族精神の「史学」による振興方針、気運と、地味な民謡研究というものに対する国家政策上の必要性との差からも考えられるようである。
- 7) 註6)と関連することであるが、史学におけるような蒐集事業は「モヌメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ」事業であっても、それが「プロイセン学派」の主導性において運営されている限りは、多民族をその下に包摂するオーストリア国家の場合、おそらく「現場」の民族主義的妨害により不完全にしか目的は達せられないである

各「地方分庫」とその中心の DVV の連携する全活動の成果を定期的に概括するものとして、DVV を後援する「民俗学会連盟」(Verband der Vereine für Volkskunde)⁹⁾ から『民謡報告』(《Volksliedberichten》) が出版された¹⁰⁾。

このようにして「DVV に諸地方文庫」という関係の組織的蒐集活動は、第二次大戦まで続いた。しかし、第二次大戦によって中断された蒐集活動は、その後今日に至っても回復されていない。若手の民謡研究者の不在により、「地方文庫」は、2つの例外¹¹⁾を除いて壊滅したままであり、また地方の有力な蒐集・研究者達¹²⁾は、DVV との十分な提携体制には再組織されていない。しかるに、全ドイツの日常生活は、今では高度な機械技術体系の重層構造の中で営まれており、この環境に、機械技術前の時代に発生した伝承民謡の大部分が、「地方文庫」という保存装置のないまま投げ出され、急激な融解・変形を待っているのが実情である¹³⁾。DVV は、この事態に対処して、蒐集活動の抜本的な反省を行ない、例えばレパトリーの豊富で有能な「伝承者」(Gewährsleute)を組織的に活用すること、「音響文庫」(Tonarchiv)を創設することなどを試行している。前者では、「伝承者」の組織的活用を「民謡研究」の成果に学ぶことなども提起されている¹⁴⁾、「音響文庫」の創設に際しては、定期的な蒐集旅行を協力専門家に依頼したのであるが、特に、従来旋律採譜の分野で稀薄であった地方¹⁵⁾に重点が置かれるという配慮もなされている。

う。それ故にか、或いは、完備した「モスメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ」事業に対する対抗上、オーストリアにおける民謡蒐集事業は、組織化が完備し、中央の「民謡振興本部」に対応して、旧帝室直属地には「蒐集事業運営委員」(Arbeitsausschüsse)を派遣した。これをジョン・マイアーは横目でにらんでいたであろう。しかしジョン・マイアーの利点は、オーストリアが「上」から「運営委員」を派遣したのに対して、自然発生的に発生していた各地の民謡愛好者集団——オーストリアにももちろん存在はしていた——に、完全に依頼することができたことであろう。オーストリアがドイツ語の民謡蒐集をする限りは、単に多民族の海の中に浮ぶ旧帝室直属地という島々を補強せざるを得ないのである。しかしこれでは組織は整備されても運営に於いて弱いといえようか。

8) これに関しては、ヴァルター・ザルメン (Walter Salmen) の『東部地方民謡の遺産』(《Das Erbe des ostdeutschen Volksliedes, 1956》) に詳述。

9) そもそも DVV の発足は、「民俗学会連盟」の決議により、発展的分裂の姿で発

足した。その指導をジョン・マイアーに依託したのである。

- 10) Bericht über die Sammlung deutscher Volkslieder, Nr. 1-18, Freiburg i. Breisgau. 1915-1941.
- 11) ウェストファリエン民謡研究所 (Westfälische Volksliedarchiv in Münster i. W.)——所長レナート・ブロックブフェーラー (Renate Brockpähler)——及びフライブルク東部ドイツ民俗学研究所 (Freiburg Institut für ostdeutsche Volkskunde)——所長ヨハネス・キュンツイヒ (Johannes Künzig) の2つが例外である。他は、昔の施設が戦災からのがれて残ったとしても蜘蛛の巣が張っているとのことである。
- 12) 主にアルバート・ブロッシュ (Albert Brosch), カール・ホラーク (Karl Horst), ヨーゼフ・ランツ (Joseph Lang), ローベルト・リンク (Robert Link), コンラート・シャイアーリンク (Konrad Scheierling) などの人々。筆者は別論文にてこの人々に触れるべきであると思う。
- 13) 小泉文夫は、『日本伝統音楽の研究, 42 頁』に次のように述べている。これには筆者も同感である。》民謡というものの実態をとらえるために、いろいろな不純なものをとり除く必要のある段階では、こうした厳密な概念規定はことのほか重要である。そして後世の芸術家などによる個人的な手加減などを除いた、永続的な民族性という意味から、民謡をありのままの姿で保存しようという学者的な態度はそこから生れてくるのであるが、民謡研究の段階がもう一步進んでくれば、今度はそうしたありのままの民謡から得た認識をもとに、どうやってその民族性を発展させていったらよいかという、いわばもう一段上の、つまり民謡研究の本来の目的の方に進まなければならない。そのためには、民謡をそのままありのままほったらかしておくとか、少しも芸術性を加えないでおくとかいうことは、反省されなければならないことになる。民謡研究の現在までの段階は、たしかにありのままの純粋なものを求めてきた。だがこれからは民謡が多少不純でも、また芸術家の手によってリファインされていても、非芸術的な野生のままほおっておかれるよりは、ずっと望ましい。そしてその際の芸術家の手加減の仕方の問題に焦点が移らなければならない。また他の面からすると、郷土性をもつ集団による伝承ということも、郷土性自体が、社会的にも経済的にもいろいろな変革をうけて変ってきた以上、まったくちがった形になりつつあるし、伝承の基本形態であった口承ということも、近頃のようにマスコミュニケーションの発達が進めば、自然量的にも増大してくるので、民謡というもののあり方が、以前とはすっかりかわってきつつあるわけである。そういう現実立つと、もはや民謡の正統性とか、概念規定とかいうことは、大した意味を持たなくなるのである。民謡にしても文化財にしても、保護するということは、単に学問的な興味からありのままに保存しておくのではなく、発展させるために保護するのだということにわれわれは気をつけなければならない。(傍点筆者)《
- 14) ゲルハルト・ハイルフルト (Gerhard Heilfurth) は、『ゴットフリート・ヘンセン——75 歳』(《Gottfried Henßen—75 Jahre. In: S. Blätter für Volkskunde, S. 333-334》) で述べている。

さて、DWM の施設自体は、幸運にも 2 度の大战の損害を受けずに資料の集積を続けることができた。その結果、1964 年 1 月現在における蒐集資料保存数は、次表のとおり多くなっている。

項 目	項 目 内 容	作 品 数
Ⅱ 項	「未印刷の民謡」(ungedruckte Volkslieder)	202921
Ⅲ 項	「印刷された民謡」(gedruckte Volkslieder)	47347
Ⅳ 項	「ヨーデル、行進曲、口上」(Tobler, Märsche, Sautaufbeutungen)	1643
Ⅴ 項	「民俗舞踏」(Volksstünge)	1076
Ⅵ 項	「ルードヴィヒ・エルクの蒐集民謡遺稿」(handschriftlicher Volksliednachlaß von Ludwig Erk)	18925
Ⅶ 項	「民謡、その保有者、民衆間におけるその消長に関する報告」(Berichte über Lieder, ihre Träger u. ihr Leben im Volke)	4146
Ⅷ 項	「歌詞 (テキスト) なく旋律のみ」(Liederweisen ohne Text)	105
Ⅷ 項	「語られた民俗詩」(gesprochene Volksdichtung)	5137
Ⅸ 項	「民謡研究及び民謡に関する覚書」(Volksliedforschung und -interesse)	124
Ⅹ 項	「ドイツ民謡と同義の外国語歌謡」(fremdsprachliche Parallelen zu deutschen Liedern)	5306
Ⅺ 項	「パンフレット」(Augsblätter)	4356
音響文庫	「ヴァルツェ (手回しオルガン・オルゴール等)、レコード、テープレコーダー」による民謡・楽曲の保存 (Lieder auf Walzen, Platten und Tonbändern)	4189

»……Es war entscheidend für den wissenschaftlichen Werdegang Gottfried Henßens, daß er im Jahre 1936 von Wolf Spamer mit dem Aufbau des Zentralarchivs der deutschen Volks Erzählung betraut worden ist. Gottfried Henßen erblickte in diesem Arbeitsfeld seine Lebensaufgabe, der er sich mit Tatkraft und Umsicht widmete. Reiche Erfahrungen hatte er bis dahin schon über die mühselverländische Erzähltradition sammeln und vor allem in seinem bekannten Werk „Volks Erzähl“ veröffentlicht können. Nunmehr galt es, in allen deutschen Sprachräumen das altüberlieferte Erzählgut systematisch zu erfassen und zu ordnen. Ueber 70 000 Eingänge an Märchen, Sagen und Schwänken konnte das Zentralarchiv bis heute registrieren.……«

- 15) 上部プファルツ (Oberpfalz), 低地バイエルン (Niederbayern), 中部・上部フランケン (Mittel- und Oberfranken) 等。

2. 資 料 整 備

さて、今は目録学の独自の発展を追跡するというのではなく、現状を概観するのにとどめたい。資料整備という基本的な仕事は、緊急な課題が提出されるたびに、恒常的な人員不足のため必ず後まわしにされてきたとはいえ、多大な努力が払われた。DWM 設立以来の資料整備の仕方には、大まかにみて5系統の分類があった。

1. 「書誌的・著者別目録」(Der bibliographische Katalog, geordnet nach Verfasser)
2. 「書誌的・事項別目録」(Der bibliographische Sachkatalog)
3. 「報告者及び演唱者別目録」(Der Einfender- und Verfängerkatalog)
4. 「地誌的目録」(Der topographische Katalog)
5. 「パンフレット、手稿、印刷物により伝承された中世歌謡の目録」
(Der Katalog der in Flugblättern, Handschriften und Drucken überlieferten älteren Lieder)

この分類法につけ加えて、戦後になって新たに考案着手された資料整備、分類は主に2系統ある。それは、(仮に上の分類に続けるならば)

6. 「頭句別目録」(Der initien Katalog)
7. 「旋律別目録」(Der melodien Katalog)

であり、また全体の仕事を合理化・簡素化するため「紙挟みシステム」(Arbeitsmappensystem) の適用や、「パンチカードシステム」(Lochkarten-system) の導入¹⁶⁾ が考えられている。「頭句別目録」とは、多くの民謡集が昔から自然のうちに目次に採用していた慣習的な分類方法である。即ち、民謡の初節の頭句(第1行)を分類するのであるが、これにより、DWM 所蔵の全民謡に渡りカード(付番号)整理がなされた。今この分類は、2つの点で有用性を発揮している。素姓を確かめうる民謡から発生した種々の変種^{バリエーション}を確認できること、中世初頭以来全ヨーロッパに分岐拡散したバラードの研究に役立っていることである。1930年以前に「地方文庫」に登録された合計160000編の変種^{バリエーション}は、今後この目録体系に再編成されようとしている。なお、この「頭句別目録」とともに着手されたが、進捗上困難に遭遇しているのは、「標語別目録」(Der

Schlagwortkatalog) と「音韻索引」(Reimregister) である。また 1960 年以来包括的な「旋律別目録」が編みだされた¹⁷⁾。これは、未印刷、既印刷を問わず、全ドイツ歌曲及び民謡を包含する予定である。現在は、仕事の 30 パーセントを終えている。さて、後述の『ドイツ民謡とその旋律』の最初の印刷原稿作成の過程で、研究対象となるバラードのコピーを必要としたことから、1930 年来、民謡のコピーを別に作成、マッペン毎に分けて整理することになった。この「紙挟みシステム」(Arbeitsmappensystem) は、極めて仕事を能率化させるものである。それは民謡の型ごとに分け、個々の民謡に関する文献指示や覚書、更に外国語の同義の歌謡も指摘するのである。本来これは、エルク・ペーメ (Erf/Boehme) の『ドイツ民謡集』(《Deutscher Liederhort, I-III, Leipzig 1893/94》) が用いている古曲的な整理法でもあつた¹⁸⁾。1930 年以前「地方文庫」に登録された民謡の変種は、これまたこの整理体系に組み込まれなければならないであろう¹⁹⁾。ヨーロッパ各国でもこの整理法をあらためて重視する所が多くなっている。

16) ベンクト・ホルベク (Bengt Holbek) の『パンチカードの使用』(《The use of punch cards. In: Arv. Tidskrift för Nordisk folkminnesforskning 16, 1960, S. 155-161》) に報告。

17) 小泉文夫は『日本伝統音楽の研究, 83 頁』において述べている。»民謡の目録作成を考えた最初の重要な人はオズワルド・コラー (Oswald Koller: 《Die beste Methode, Volks und volksmäßiger Lieder nach ihrer melodischen Beschaffenheit lexikalisch zu ordnen. Sammelbände der Z.M.G., IV. 1902-1903》) で、——(本稿の筆者は、エルク・ペーメ (Erf/Boehme) の『ドイツ民謡集』(《Deutscher Liederhort》) 自体、目録体系の形態を示していると考え。今日の段階では、それは原始的な目録体系とみなされる)——彼 (O・コラー) は民謡の和声やリズムを度外視して、純粋に旋律だけを取りあげ、最初の 4 つの重要な (アクセントのある) 音の音名をアルファベット順に並べることに、カタログを作ろうとした。先にもちょっとふれたイルマリ・クローン (Imari Krohn: 《Welches ist die beste Methode um Volks und volksmäßige Lieder nach ihrer melodischen (nicht textlichen) Beschaffenheit lexikalisch zu ordnen? Sammelbände der Z.M.G., IV. 1902-1903》) はそれに対して、最初の第 1 節の中の本質的に重要な 3 つの音、つまり旋律的強調の「出発点」(Ausgangspunkt der melodischen Betonung) と、「旋律的表出の中心点」(Mittelpunkt des melod. Ausdrucks) と、「終止の休息点」(Abfließenden Ruhepunkt) を決定した。しかしこの 3 つの音はかならずしも最初の音、最高音、終止音と常に一致するとは限らない。彼はこれを高さの順に並列して第 1 級の分類をし、さらに歌詞・楽式の 4 行を中心に、より少ない、より多いとい

う3つに分け、最後に各節の終止型(ドミナント、2重ドミナント等)によって、数千のフィンランド民謡を分類した。《

しかし筆者には、これらの分類によるカタログはいずれも旋律を恣意的に分解しているように思われる。今日作成される旋律目録は、背後に「音響文庫」という発達した機械装置を駆使する機関をひかえているため、このようなことは行なわれな
いであろう。むしろ、現代における「演唱者」(Vorfänger)の演奏を、そっくり「テープレコーダー」(Ton Band)に保存する等の措置をとるものと考えられる。この方が、自然に即しているからである。注78)で付記する『口承による古代民謡』(《Alle Lieder aus mündlicher Überlieferung》)は、付録冊子であるが、主体はむしろ右のような、「演唱者」の朗読、演奏であることも、このことを示すものと思われる。従って、オズワルド・コラー、イルマリ・クローンの業績を再評価する機会には、このような目録作成完了後訪れるかもしれない。

- 18) エルク・ペーメ (Erk/Boehme) 『ドイツ民謡集』(《Deutscher Liederhort》) 第1巻序文でペーメは、次のように整理をしたと述べている。

》……Sammtliche Volkslieder habe ich in folgende Abtheilungen gebracht, wobei nicht verschwiegen sei, daß viele Volkslieder einer strengen Klassifizierung widerstreben und manche in zwei oder drei Fächer sich einreihen ließen.

I. Sagenlieder (Balladen).

1. Nachtlänge der Göttersage. (Zauber- und Märchenlieder.)
2. Heldenagen.
3. Ritter- und Ränberagen.
4. Sagenhafte Mordgeschichten und Gefangenschaft.
5. Sagenhafte Liebesgeschichten mit glücklichem Ausgange.
6. Sagenhafte Liebesgeschichten mit tragischem Schluß.
7. Schalks- und Schelmenlieder.
8. Schwänke.
9. Thiersage und Pflanzenmärchen.
10. Bilder aus dem Familienleben.
11. Todtenagen (Geisterliebe und Grabesstimmen.)
12. Gottesgerichte und Höllenstrafen.

II. Historisch-politische Lieder.

III. Liebeslieder.

- a) Von glücklicher Liebe.
- b) Von unglücklicher Liebe.

IV. Abschieds- und Wanderlieder.

V. Tagelieder und Rittgesänge.

VI. Hochzeit- und Ehestandslieder einschl. Nonnenklagen.

VII. Tanz- und Spiellieder.

VIII. Räthsel-, Wunsch- und Wettlieder.

IX. Trink- und Fechlieder.

X. Anfangslieder der Jugend an Volksfesten (Heischelieder).

XI. Ständelieder.

1. Landsknechts- und Reiterlieder.
2. Soldaten- und Kriegslieder.
3. Jägerlieder.
4. Hirten- und Alpenlieder.
5. Lieder auf und von Bauern.
6. Bergmannslieder.
7. Allerhand Beschäftigung im Freien.
8. Handwerkerlieder.
9. Hobellieder.
10. Studentenlieder.

XII. Scherz- und Spottlieder.

XIII. Vermischten Inhalts.

XIV. Kinderlieder (kleine Auswahl).

XV. Geistliche Lieder.

1. Festlieder (kathol. und protest.).
2. Legenden-Lieder der Katholiken.
3. Lob- u. Dank-, Bitt-, Buß- u. Trostlieder (Hausandacht).«

なお、『ドイツ民謡』と DWA の関係を、ブレトニヒ (Brednich) はこう述べている。

»……Es soll nicht unerwähnt bleiben, daß der *Grf=Böhme* mittelbar der Anlaß für die Errichtung des Deutschen Volksliedarchivs geworden ist, als dessen Hauptaufgabe es bei der Gründung 1914 bezeichnet wurde, dem deutschen Volke eine neue wissenschaftliche Gesamtausgabe seines Volksliedes zu geben. John Meiers Plan ging vernünftigerweise zunächst dahin, die Konzeption des „Viederhortes“ zugrunde zu legen und den dadurch gesteckten Rahmen von drei Bänden bei Neuauflage nicht zu überschreiten. Als die Planung Ende der zwanziger Jahre in ihr entscheidendes Stadium trat, hatte der Verlag Breitkopf u. Härtel den *Grf=Böhme* inzwischen in 2. Auflage herausgebracht und war an einer Neubearbeitung nicht allzusehr interessiert. So kam es, daß das Volksliedarchiv mit seiner Aufgabe des „Deutschen Volkslieder mit ihren Melodien“ eigene Wege beschritt und sich mehr und mehr dem vergleichenden Arbeiten auf internationaler Ebene und der Herstellung von Balladenmonographien zuwandte. Die bisher vorliegenden vier Bände der „Deutschen Volkslieder“ mit ihren 88 Balladen haben den *Grf=Böhme* zwar an wissenschaftlicher Gründlichkeit und Vollständigkeit weit übertroffen, aber insgesamt keineswegs entbehrlich gemacht. Und es wird zweifellos auch noch viele Jahrzehnte dauern, bis man in der Wissenschaft auf die Benutzung des bewährten „Viederhortes“ verzichten kann.« (Zn: Jahrb. f. Volksliedforschung X, 1964, S. 163)

- 19) 約 300000 編ともいわれる。これは、分類の仕方による数字の違いであろう。この変形を註 18) で示したエルク・ペーメ (*Grf=Boehme*) の分類に従って、「マップ」(紙バサミ) 毎に分類するのである。「マップペンシステム」は、「紙バサミ方式」と呼ぶことができる。

3. 出版活動

1928年に創刊された、DWA独自の研究雑誌『民謡研究年報』(《Jahrbuch für Volksliedforschung》)は、DWA設立の3つの意図の1つ、「ドイツ民謡の包括的で学問的な著作を公刊する」意図の実現であった。しかしこの『民謡研究年報』出現の背景には、充実した研究陣構成が必要であって、ジョン・マイヤーの苦労はここにもあった。民謡においては、歌詞(テキスト)と旋律(メロディー)は結合し、統一されているというヘルダー(J. G. Herder 1744-1803)以来の正統的民謡把握に立つジョン・マイヤーは、歌詞(テキスト)と旋律(メロディー)を同格の研究対象に設定した。彼は、DWA設立当初、マックス・フリートレンダー(Max Friedländer)に音楽部門の指導を託したが、マックス・フリートレンダーがベルリン大学教授として音楽史研究に転ずるとともに、1928年DWAの音楽部門の指導はフレート・クヴェルマルツ(Fred Quellmalz)に委ねられ、継いでヴァルター・ヴィオラ(Walter Wiora)が受け持った。民俗学的・文学的な歌詞(テキスト)研究部門を構成した人々は、ハーリー・シェーヴェ(Harry Schewe)、エーリヒ・ゼーマン(Erich Seeman)²⁰⁾、ゲルハルト・ハイルフルト(Gerhard Heifurth)、ヴィルヘルム・ハイスケ(Wilhelm Heiffe)等であった。『民謡研究年報』は第2次大戦前8巻まで継続され戦乱のため中断した。準備を終えていた第8巻用の原稿は1943年のライプチヒ爆撃で焼失したのであったが、ジョン・マイヤーは保存してあったゲラ刷りをもとにして1951年10論文を出版した。1953年以降、DWAはバーデン・ヴュルテンベルク(Baden Württemberg)文化省の強力な援助を受けることになり、『年報』の再刊が可能になった。そして新たに『第9年次年報』(《Jahrbuch für Volksliedforschung, IX. Jahrgang》)——エーリヒ・ゼーマン75歳誕生記念論文集——が1964年に出版された²¹⁾。『第10年次年報』は1966年出版された²²⁾。しかしDWAの着手した最も本格的な研究は、ジョン・マイヤーの指導のもとに始められた民謡の個々の精査という途方もなく困難な研究であった²³⁾。ジョン・マイヤー以前の数十年間に、自然発生的に集積された蒐集民謡集のうちの約300冊はエルク・ベームが総括したのであるが、DWA・地方文庫を通じて組織的に集積された蒐集民謡を総括する課題は彼等に負わされた。したがっ

て、後者は、個々の民謡の歴史を実証的に精査する点でエルク・ペーメ『ドイツ民謡集』を学問的に一層発展させたものとして現われた。長い準備作業の後1934年に『ドイツ民謡とその旋律、第1巻。バラード』(《Deutsche Volkslieder mit ihren Melodien, 1 Bd. Balladen》)が上梓される運びとなった。それはエルク・ペーメに学び、伝承史の源を遠く中世に発する古い民謡から始まって年代順に配置されている。第1巻は19バラード、翌年の第2巻の上巻には13バラードが掲載された。当時の予定は、第1巻、第2巻がバラード、第3巻は「歴史的民謡」(Historische Lieder)、第4巻、第5巻は「恋愛・別離の民謡」(Liebes- und Abschiedslieder)、第6巻は「社交の民謡」(Geselligkeits- und Gemeinschaftslieder)、第7巻は「職業の民謡」(Ständelieder)、第8巻は「宗教歌」(Geistliche Lieder)、第9巻は「専門用語辞典、文献目録、索引」(Glossar, Bibliographie, Register)、第10巻は「童歌」(Kinderlieder)というものであったが、仕事の途中で計画変更を迫られるに至った。研究は新しい研究へと自己展開するのである。それ自体民謡としての総合的性格をもち、そして全民謡の重要な構成部分であるバラードを、この第1巻、第2巻の中に納めることは不可能になってきた。個々のバラードの研究深度が高まる一方で、蒐集活動も増々拡大し、消化すべき資料は幾何級数的に増大してきていた。その間に第2次大戦があり、戦後、バラードを第1巻、第2巻に納める場合の計画はそれとして置き、あらためて十分にバラードを取扱う計画が考えられるようになった。前述の如く、DVAは1953年バーデン・ヴュルテンベルクの保護を受けるのであるが、これにより1956年にDVAの定員増加措置がとられ、戦争による空白を埋めることに全力をあげた。折よくDVAが新たな物的基礎の上に立ったことは、この新計画を具体化する動機ともなったのである。1953年以後1963年まで、エーリヒ・ゼーマンはジョン・マイアーの後継者となった。この間『ドイツ民謡とその旋律』第3巻上巻(バラード)を出版できた。その後第4巻まで出版、第5巻の準備も完了している。しかし、この書も断片であって、バラードに対する取組みは緒についたばかりである。今までDVAがとり扱ったバラードは約100編である。しかしエルク・ペーメ『ドイツ民謡集』第1巻のみでも220番(1番号で数編)のバラード番号であり、エルク・ペーメ以降の新民謡集等は更に100編を越えるバラードを報告している。なお、

この新民謡集には、バラード以外に 150 編以上の小新聞紙類に掲載の民謡、旅芸人等の民謡もあるのであるが、これらの取扱いの後廻しとなるといわれている。この 300 編を越えるバラードは、従来の出版を再厳選・圧縮・再評価して 8~9 巻のバラードの部にまとめられる予定であるが、戦前の構想を全体としては引き継ぐのであるから、「専門用語辞典」(Glossar)、「重要語索引」(Konfodanz)、「一般索引」(Register)、「文献目録」(Bibliographie)を想定加算するならば、『ドイツ民謡とその旋律』は、18~20 分冊に達すると考えられている。これは当面最も重要な課題となっており、今後かなり長期にわたる DWM の仕事となるであろうと推定される。しかもこの実現は、DWM の現在の構成員(研究所長 1 人、専門研究員 6 人)を倍化することによってはじめて可能になると当事者は力説している²⁴⁾。

20) エーリヒ・ゼーマン (Erich Seemann) の業績については、『民謡研究年報、第 9 年次報』(『Jahrbuch für Volksliedforschung, IX. Jahrg. Festschrift zum 75. Geburtstag von Erich Seemann, S. 171-180』) に、エーリヒ・ゼーマン著作一覧表、年時別業績表がある。

21) 註 20) に示したように、この『第 9 年次報』は、記念論文集であるが、後述の「比較民謡学」(Die vergleichende Volksliedforschung) 展開の一定の段階をも示している。「同学」に関係ある論文をみると、次のとおりである。

1. ベートランド・H・ブロンソン (Bertrand H. Bronson) 『合衆国における民謡、1910 年~1960 年』(『Folk-Song in the United States, 1910-1960. Reflection from A Student's Corner』)。
2. ヴォルフガング・ズッパン (Wolfgang Suppan) 『ドイツ語の民謡における「原型」と「くずれ」の観察』(『Die Beobachtung von „Original“ und „Singmanier“ im deutschsprachigen Volkslied』)——傍点筆者。即ち従来単に「民謡」(Volkslied) 又は「ドイツ民謡」(Das deutsche Volkslied) といわれていたのに対し、ここであらためて「ドイツ語の」(deutschsprachig) と、ドイツ語民謡を相対化している点も、多言語の民謡研究が DWM において一般的通念となりつつあることを暗に示しているのであろう。
3. ベンクト・R・ジョンソン (Bengt R. Jonsson) 『中世ドイツ民謡のスウェーデンにおける伝承』(『Ältere deutsche Lieder in schwedischer Überlieferung. Einige Beobachtungen』)、ジョンソンは『ローマの伯爵』(『Der Graf von Rom』)、『オーストリアの城』(『Das Schloß in Österreich』)、『冬のバラ』(『Winterrosen』)、『王の子供達』(『Die Königskinder』)等を素材として論じている。
4. ラヨス・ヴァルギヤス (Lajos Vargyas) 『ハンガリーにおけるドイツのバラードと物語り歌によせて』(『Zur Verbreitung deutscher Balladen und Erzähllieder in

Ungarn)——傍点筆者。バラードと物語り歌の差違は、「バラード」(Ballade)には旋律(メロディー)が伴い歌われるのであって、これは日本では「唄い」の系統に属し、「物語り歌」(Erzählief)は「語り」に属する。必ずしも「本来的」(eigentlich)に旋律(メロディー)を伴わなくてもよい、性格的にはたまたま伴っているであろう。実際はすべて旋律(メロディー)があるが、その性格上、他の歌詞(テキスト)のものを代用することも多く起り得るのであろう。日本でも、「浪花節」は伴奏楽器(三味線)があるけれども、演唱者は浪花節語りである。

5. アーチャー・テラー (Archer Taylor)『バラードと物語りの並行』(《The Parallels between Ballads and Tales》)。テラーの素材は、アメリカにおける民謡研究、とくにチャイルド (Francis James Child) の蒐集民謡に依拠している。
6. エリック・ダル (Erik Dal)『デンマークにおけるアハスヴェルス、民衆本、民謡と同類歌謡』(《Afskrift over i Dänemark. Folksbøger, Folkslæder og Beretninger》) 上記著書のうち、ドイツ外の研究者の所属をみると、ブロンソンは (California, University of California, Department of English, USA), ジョンスンは (Stockholm Svenskt Visarkiv, Regieringsstaten, Schweden), ヴェルギヤスは (Budapest, Ungarn), ダールは (København, Forshammersvej, Dänemark) である。
- 22) 『民謡研究年報第10年次報』には、「比較民謡学」に関係あるものとしては、ルードルフ・シエンダ (Rudolf Schenda) の『シシリアのバラード、「カリニのバルニッサ」の3つの変形』(《Drei Varianten der sizilianischen Volksballade „La barunissa die Carini“》) という論文があり、「報告」(Berichte)として、Tj. W. R. デ・ハーン (Tj. W. R. De Haan) の『オランダに於ける民謡研究の今日的状況』(《Die heutige Lage des Volksliedes in den Niederlanden》), オルトリッヒ・スイロバトカ (Oldřich Sirovátka) 『チェコのバラードの研究』(《Die Erforschung der tschechischen Volksballade》) が収められている。其他書評として「比較民謡学」に対する大きな考慮がみられ、北欧、東欧のみならず、「比較民謡学」はイタリヤをもその研究領域に含めてきたことを示している。《Alessandro Maragliano: Tradizioni popolari vogheresi》, 《Vittorio Paliotti: La canzone na poletuna ieri e oggi》, 《Mario Borgatti: Canti Popolari Emiliani raccolta Cento》等に対する書評がそれである。『第10年次報』に執筆したドイツ以外の筆者の所属研究所は、ポール・ジョドニイ (Pál Jádányi) が (Budapest, V, Magyar Tudományos Akadémia Roosevelt ter 9, Ungarn), オルトリッヒ・スイロバトカ (Oldřich Sirovátka) が (Brno Československá Akademie Věd, nám. Rudé armády 9, ČSSR) である。
- 23) エーリヒ・ゼーマンは『ジョン・マイアー論』(《John Meier, Ein Leben im Dienste am Volkslied. In: Die Musikforschung, VI. Jahrg. 1953/Heft 4》) で述べている。

»……Die Beschäftigung mit diesen alten, meist verklungenen Liedern weckte zugleich sein Interesse für den lebenden Volksgesang, und wenige Jahre nach der 1892 erfolgten Aufgabe der Bergtreiben konnte er eine mit R. Köhler gemeinsam unternommene Ausgabe der an der Mosel und Saar gefungenen Lieder nach Wort und Weise vorlegen. Wie schon bei den

この計画内容（バラードの部）は、次表に掲げるバラードであるが、これは公開討論のために公表されてもいる。DWMとしては、専門家（含外国の研究者）及び広く一般国民の見解を聴取したいのであろう。次表においては、（ ）括弧内の数字は、当該グループ内の対象バラード数を示し、それに続き取扱われる特徴的なバラードが示され、E・B はエルク・ペーメ『ドイツ民謡集』に示された民謡番号などを示している。なお、脚注において、頭目録の方法により頭句を、場合により第2句をもくゝ内に示した。

（また脚注の出典は、エルク・ペーメの上記書物に示されているもののうち主なものであるが、エルク・ペーメの不備を反映して、不備なものとなっている。DWMはこれをなお完璧なものにし、個々の場合について精査しようとしている。）

項 目	掲 載 の 民 謡 例	作 品 数
Ⅱ.	「家族の事件」(Familienereignisse)	(計 45 編)
a.	「結婚の破綻、その他」(Ehebruch u. a.)	(6 編)
	『最初の夫』(《Der Vornwirth》) ²⁵⁾	E・B 199
	『巡礼者』(《Der Pilgrim》) ²⁶⁾	E・B 138
b.	「兵士としての少女」(Mädchen als Soldat)	(7 編)
	『大尉の婦人』(《Die kapitänische Dame》) ²⁷⁾	E・B 1387

Bergreihen gab er auch bei letzterer Sammlung zu jedem Liede Hinweise auf sein sonstiges Vorkommen und seine Verbreitung, sich hierbei nicht nur auf jüngere Volksliedsammlung stützend, sondern auch ältere Drucke und Flugblätter zu Rate ziehend. Nach Möglichkeit suchte er auch die Urheber der Lieder festzustellen. Durch solche Arbeit wurde sein Blick ganz besonders auf die Wandelbarkeit des Volksliedes gelenkt, traten ihm doch ständig unterschiedliche Spielformen eines und desselben Liedes vor Augen. Mit scharfer Logik an einem umfänglichen Material durchgeführte Untersuchungen ließen ihn zu einer anderen Auffassung vom Wesen des Volksliedes kommen, als sie zu seiner Zeit galt.……»

- 24) ロルフ・ヴィルヘルム・ブレトニヒ (Rolf Wilhelm Brednich) 現所長の報告は次のとおりである。(In: J. Blätter für Volkskunde, Bd. 55, S. 314)

»……Daß für die Veröffentlichung dieser Bände beim jetzigen Personalbestand des Deutschen Volksliedarchivs etwa die doppelte Anzahl an Jahren erforderlich sein dürfte, soll ……bemerkt werden. Das Freiburger Institut bedarf dringend einer besseren finanziellen und personellen Ausstattung. Falls sich dies nicht erreichen lassen sollte, müßte die Gesamtkonzeption des Volksliedwerkes gründlich neu durchdacht werden. Dies ist von Sachleuten—wie Walter Wiora……immer wieder gefordert worden.«

c.	「夫の帰郷」(Heimkehr des Ehemannes) 『復員の兵士』(《Der heimkehrende Soldat》) ²⁸⁾	(2編) ㊤・㊦ 191
d.	「中傷」(Verleumdung) 『家付の神父』(《Der Hauspfaff》) ²⁹⁾	(2編) ㊤・㊦ 55
e.	「死」(Der Todesfälle) 『粉屋の娘』(《Müllers Töchterlein》) ³⁰⁾	(2編) ㊤・㊦ 108
f.	「死んだふりをした花嫁または妻」(Scheintote Braut oder Frau) 『死んだふりをした人』(《Die Scheintote》) ³¹⁾	(6編) ㊤・㊦ 196
g.	「残酷な母」(Die grausame Mutter) 『無慈悲な母』(《Die Rabenmutter》) ³²⁾ 『飢えた子供』(《Des hungernde Kind》) ³³⁾	(2編) ㊤・㊦ 212 ㊤・㊦ 189
h.	「孤児のパラーデ」(Waisenballaden) 『母の墓の傍の孤児』(《Waisen an der Mutter Grab》) ³⁴⁾	(10編) ㊤・㊦ 202
i.	「両親と子供」(Eltern und Kinder) 『報復』(《Wiederbergeltung》) ³⁵⁾	(4編) ㊤・㊦ 187

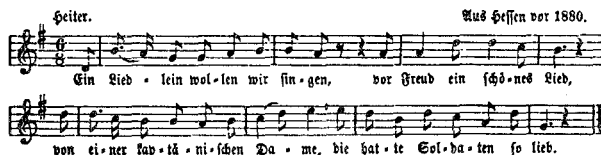
- 25) <Es wollt' ein Herr ausreiten> エルク・ベーム (Erk/Boehme) の『ドイツ民謡集』(《Deutscher Lieberhort》)——以下『エルク・ベーム』と略す——第1巻602頁～604頁掲載。199

(a) 

Schr. mäßig. Aus Schlesien (Hr. Reife), 1851.

1. Es wollt' ein Herr aus-rei-ten, er ritt wol in die Wei-te. Er
ritt wol ü-bern ge-weih-ten Kirch-hof, da schrie-en ihm die To-ben nach.

- 番は2編。(a)及びその変形(b)。(a)＝Aus Schlesien (Walterdorf bei Reife): 出典ホフマン (Hoffmann), 『ムゼウム』(《Prutz' Museum, 1852, S. 161》)。(b)＝題名 „Das nasse Grabbein“, Aus dem Rühlandchen. とある。——以下蒐集地名等できるだけ原綴。
- 26) <Von Walhen fuor ein pilgerin> 『エルク・ベーム』第1巻462頁。(a) 13世紀シュレーベン (Schleiden) の詩人, ゴットフリート・フォン・ナイゼン (Gottfried von Neiden) 作。出典①『メネッセの手稿』(《Meneßes Handschrift, S. 158》)。(b)＝題名 „Entführung einer Edelmanns-frau durch einen als Pilger verkleidete Grafen“ という長たらしい変形。出典は②『整理番号 8° のパンフレット』に掲載。このパンフレットは、パーゼルで印刷, ヨーハン・シュレーター (Johann Schröder) が1610年に発行。又の出典は③ウーラント (Johann Ludwig Uhlant) で『古ドイツ民謡集』(Alte hoch und niederdeutsche Lieder, 1844-45, Nr. 47)に掲載。
- 27) <Ein Lieblein wollen wir singen,> 『エルク・ベーム』第3巻255頁。ヘッセンの古い兵士の歌。民衆間で歌われていたものを直接記載・採譜——Aus Homburg, Rüdingen



(Mr. Hanau) und Winterscheid (Mr. Ziegenbain)。他の旋律(メロディー)のものもあるが、掲載省略。また『ミットラー民謡集』(《Mittler, Nr. 231》)。『キュンツェル、ヘッセン史』(《Künzler, Gesch. von Hessen, S. 568》)。『レヴァルター民謡集』(Zewalter, B. 2. aus Niederhessen, II, Nr. 31)。

- 28) <Soldat kam aus dem Friege, hurrah!> 『エルク・ペーメ』第1巻585頁~589頁。(a)=Aus dem Odenburgischen. シュレジコンから近似した歌詞(テキスト)が発見されている。即ち ①『ホフマン民謡集』(《Hoffmann, Nr. 288》)。しかし、これには最後の

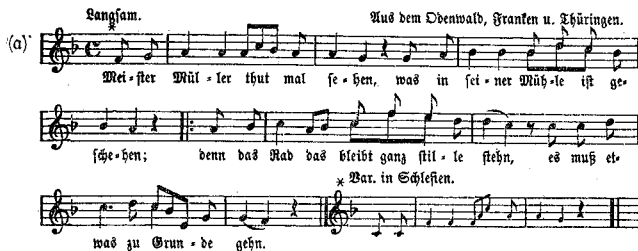


「囃し詞」である「Hurrah」——日本民謡に当てはめるのは適當ではないが、無理に当てはめれば「ホイ、ホイ」という詞か?——が欠けている。同様に「囃し詞」のないものは、プファルツ地方、②『シュエラ、ユングブルンネン』(《Scherer, Jungbr., Nr. 151》)。その他歌詞(テキスト)は③『ヴァルター民謡集』(《Walter, Nr. 103》)、④『ジムロック民謡集』(《Simrock, Nr. 310》)、⑤『シャーデ、テューリンゲン民謡集』(《Schade, Thlr., XI., Nr. 9》)等。ヘッセンからは⑥『ミットラー民謡集』(《Mittler, Nr. 262》)。(b)=Aus dem Odenwald vor 1850。(b)の変形はaus dem Kirchhessen。出典⑦『ミットラー民謡集』(《Mittler, Nr. 262》)。7年後に帰郷復員した兵士の歌は、フランスにおいても蒐集されている(《la femme du la soldat》)。(c)=歌詞(テキスト) aus der Wetterau (Zaugsdorf 1892)、旋律(Melodie) aus dem Lahn, Dillkreis und Kreis Hanau um 1880。

- 29) <Es zog ein Herr in den Krieg> 『エルク・ペーメ』第1巻184頁。Aus Pommern, dem Wusendorf bei Fiddichow 1860。



- 30) <Meister Müller thut mal sehen> 『エルク・ペーメ』第1巻385頁～385頁。(a)＝歌調(テキスト)とはじめの旋律(メロディー)——385頁に2旋律が掲載されている——は、出典が多くエルクの①『民謡集』(『Viederhort, Nr. 23』)——以下『エルク』と略す——。また②『ジムロック民謡集』(『Einrock, Nr. 66』)。これは1848年蒐集, aus Breitenfath. また③『ミットラー民謡集』(『Mittler, Nr. 228』)。Aus Heffen. ④『O.ベッケル民謡集』(『O. Büchel, Nr. 23』)。⑤『ディトフルト民謡集』(『Ditfurth, II, Nr. 260』)。⑥『ホフマン、シュレジエン民謡集』(『Hoffmann, Schles. Volksl.,



- Mr. 33)). ⑦『シェーラー民謡集』(《Scherer, Volksl., 1868, Nr. 24》)。Aus der bair. Pfalz. ⑧『A・ミュラー民謡集』(《M. Müller, S. 84》)。⑨『ペーター民謡集』(《Peter, 215》)。⑩『フィトラー民謡集』(《Siebler, 191》)。⑪『フィルマー民謡集』(《Wimmar, Volksl., 3 Aufl., S. 141》)。フィルマーによれば、この歌は最初ヘッセン

(b) Sehr mäßig. Aus Dypenheim a. Rh. u. Pertheim in Oberhessen.

Es hü-tet ein Schä-fer wol an dem Rain, o weh! er
hört ein klei-nes Kind-lein schrein, o weh! er hört ein klei-nes
Kind-lein schrein, o weh und a-de, o weh!

Sehr mäßig. Aus Alberode (Str. Wittenhausen, Reg.-B. Cassel).

Es hü-tet ein Schä-fer an je-nem Holz, der hör-te ein klei-nes
Kind-lein schrein, der hört ein klei-nes Kind-lein schrein.

Wittenhausen, Reg.-B. Cassel). (f) = 題名 „Die dreifache Kindsmörderin“. 出典 ⑦『ジムロック民謡集』(《Einrock, Deutsche Volksl., 1851, S. 87, Nr. 37^b)。これはアールゴイの方言。またの出典 ⑧『エルク』Nr. 41^b, 『角笛』4, 196。またの出典 ⑨『クルツ, スイス民謡集』(《Rutz, Schweizerliche Volksl., S. 122)。

- 33) <„Ach Mutter, ach Mutter! es hungert mich, gib mir Brot sonst sterbe ich!“> 『エルク・ベーム』第1巻579頁。(a) = 出典 ①『エルク』Nr. 20。口承によるものをエルクが蒐集, 但しエルクはテューリングゲンで歌うのではなく語られているのを聞いている。若干違う歌詞(テキスト)のものは ②『ウーラント民謡集』(《Umland, Nr. 119)に

Mäßig, im Sprechten. Mel. aus der Gegend von Halle und Gießen.

„Ach Mut-ter, ach Mut-ter! es hun-gert mich, gib mir Brotsonst ster-be ich!“

„War-te nur, mein lie-bes Kind, wir wol-len erst sä-en ge-schwind.“

Anfang zu Str. 2-6.

Und als es nun ge-sä-et war, schrie das Kind noch im-mer-bar: Ach
(wie oben.)

Str. 7. (immer langsamer.)

Und als es nun ge-ba-eten war, lag das Kind schon auf der To-btenbah.

(b) Aus Schönbach an der Elbe. 1878.

„Mut-ter, ach Mut-ter, es hun-gert mich, gib mir Brot, sonst ster-be
ich!“

„War-te nur mein Kind! mor-gen wollen wir sä-n geschwind!“

als das Korn ge-sä-et war, da sprach das Kind noch im-mer-bar.

あるが、ウーラントはホーンハウゼン (Hornhausen) が 1808 年『文学年鑑』(《Museum almanach für 1808, S. 32: Gedenkfes》) に掲載したのを転載。最新の歌詞 (テキスト) は、ツッカルマリオにより再加筆され、旋律を短調にされて ③『クレッチマー・ツッカルマリオ民謡集』(《Fr. u. Zuer., II, 352》) にある。また ④『ツアルナック民謡集』(《Zarnack, II, Nr. 43—Fr. 1, S. 86—》) に。他の歌詞 (テキスト) は ⑤『ジムロック民謡集』(《Simrock, Nr. 354》)。⑥『シュライヒャー民謡集』(《Schleicher, S. 107》)。⑦『A・ペーター民謡集』(《H. Peter, S. 212》)。⑧『シュスター民謡集』(《Schuster, S. 45》)。⑨『シュミッツ民謡集』(《Schmitz, 162》)。⑩『ユングブルンネン』(《Jungbr., 129》)。⑪『A・ミューラー民謡集』(《H. Müller, S. 185》)。⑫『ドウンガー、フォークトランデ地方民謡 (童謡) 集』(《Dunger, Vogtländische Kinderlieder, S. 88》)。⑬『ミットラー民謡集』(《Mittler, 43》)。なお、児童の教科書にも多く採用されている。ウーラントは、この民謡の発生は 16 世紀で古民謡であり、そして、5 人の飢え寝ている子供とその際生じた奇跡が民謡の発生に契機を与えた、と推定している。この歌は大抵の地方で旋律 (メロディー) なく「語り」となっている。(b)=Aus Schönbeck an der Elbe 1878.

- 34) <Und Gott erbarm dich, Herrgott mein> 『エルク・ベーム』第 1 卷 608 頁。(a)=出典 ①『マイナート民謡集』(《Meinert, Volksl. aus dem Nuhländerchen, Nr. 47》)。この民謡の原形は ②『ミットラー民謡集』(《Mittler, Nr. 342》)。類似のものがデンマークにあり、独訳は ③『グリム、古代ドイツ英雄歌謡とバラード』(《Grimm, Altd. Heldensl.

(c) *Andantino.* *Flamländisch.*

Ach! Tjan-ne (zey - te hy) Tjan-ne, wae-rom en zing-de gy niet?

*Ach! wat zou-de ik gaen zin-gen, binst dry da-gen en bender ik niet.

Andere Melodie. *Holländisch, 1860.*

Als Ja-cob te-gen San-ne-kespraek, te-gen San-ne-kespraek: Waerom

zing-de gy geen lie-de-ken meer? Wae-rom zou-de ick lie-de-ken

zin-gen, ja zin-gen, bin dry da-gen en lee-ve ick niet meer.

* Sanneke = Sufjannchen.

und Balladen, Nr. 30, S. 147》)。其他出典はテレゼ (Therese Albertine Luise von Jacob, verehel. Robinson) の ④『ドイツ国民の民謡の歴史的 성격描写の試み』(《Versuch einer geschichtlichen Charakteristik der germanischen Nationen, S. 237》)。(b)=題名 „Die Waise an der Mutter Grabe“. 口承による。Aus Doffenheim Kreis Labern, im Elsaß. ⑤ ミュンデル (Mündel) が 1883 年に蒐集したのは、同地の農村の少女の歌集から。(c)=題名 „Die Kinder an der Mutter Grabe“. 旋律 (メロディー) にはフランドル地方のもの (Flamländisch) と、オランダのもの (Holländisch) と 2 通りある。前者は ⑥

項 目	掲 載 の 民 謡 例	作 品 数
Ⅷ.	「求婚、恋のはじまり、誘惑の警告など」(Werbung, Anbahnung von Liebesverhältnissen, Warnung vor Verführung etc.)	(計 89 編)
a.	「花婿と花嫁」(Bräutigam und Braut) 『レノーレ』(《Renore》) ³⁶⁾	(6 編) ㊤・Ⅷ 197
b.	「誘惑の警告」(Warnung vor Verführung) 『警告者の駒鳥(小夜啼鳥)』(《Nachtigall als Warnerin》) ³⁷⁾ 『少女と兎』(《Mädchen und Hasel》) ³⁸⁾	(8 編) ㊤・Ⅷ 173 ㊤・Ⅷ 174
c.	「牧草と密会」(Grasen und Hüten) 『少女と書記』(《Graferin und Schreiber》) ³⁹⁾	(9 編) ㊤・Ⅷ 71
d.	「殺された愛人」(Der erschlagene Geliebte) 『致命傷』(《Der Todwunde》) ⁴⁰⁾ 『傷ついた夫』(《Der verbundene Mann》) ⁴¹⁾	(3 編) ㊤・Ⅷ 96 ㊤・Ⅷ 122
e.	「死による恋愛の終り」(Tod beendet Liebesverhältnis) 『首をはねられた騎士』(《Der enthauptete Ritter》) ⁴²⁾ 『墓の中の愛』(《Herzlieb im Grab》) ⁴³⁾	(3 編) ㊤・Ⅷ 95 ㊤・Ⅷ 201
f.	「誘惑」(Verführung) 『飲代になった着物』(《Die verstoffenen Kleider》) ⁴⁴⁾ 『野イチゴ摘みの少女』(《Die Brombeerpflückerin》) ⁴⁵⁾	(15 編) ㊤・Ⅷ 113-15 ㊤・Ⅷ 121
g.	「誘拐と逃亡」(Entführung und Flucht) 『肉屋の娘』(《Schlächters Tochterlein》) ⁴⁶⁾	(7 編) ㊤・Ⅷ 120
h.	「誘惑者の処罰」(Bestrafung des Verführers) 『厚かましい少年』(《Der freche Knabe》) ⁴⁷⁾	(2 編) ㊤・Ⅷ 131
i.	「愛と忠実」(Liebe und Treue) 『愛の試験』(《Liebesprobe》) ⁴⁸⁾ 『ドルスリとバーベリ』(《Dursli und Babeli》) ⁴⁹⁾	(17 編) ㊤・Ⅷ 67 ㊤・Ⅷ 80

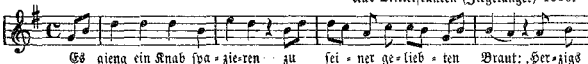
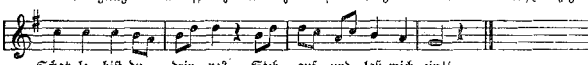
『コーゼマーカー民謡集』(《Souffemacher, Nr. 58》)。後者は、1860年 ㊦ クレツェリウス (Creelius) がエルクに提供。(b)=題名 „Stimme der Mutter aus dem Grabe“。Aus der Umgebung von Straßburg. 出典 ㊧ 『ミュンデル民謡集』(《Mündel, Nr. 34》)。
 35) <……> この民謡の頭句は不明である。次の句第2行目は <Vor! mein Sohn, das ist genug!> 『エルク・ペーメ』第1巻577頁。Aus dem Sühländischen. 出典 ㊩ 『マイナート民謡集』(《Meinert, S. 106, Nr. 15》) 内容は ㊨ 『角笛』II, 270 と同じ。

i.	「嫉妬または別の動機が招いた殺人及び自殺、或いは恋焦がれたの復讐」 (Eiferhuhbt u. ä. Motive verleiten zu Mord und Selbstmord; Rache der Verführten) 『ユダヤ女』 (《Die Tordin》) ⁵⁰⁾ 『嫉妬する少年』 (《Der eiferfüchtige Knabe》) ⁵¹⁾	(9 編) ㊤・㊦ 98 ㊤・㊦ 48
i.	「不義」 (Untreue) 『不実な花嫁』 (《Die untreue Braut》) ⁵²⁾	(2 編) ㊤・㊦ 211
I.	「帰りが遅くなりすぎた花婿」 (Der Bräutigam kehrt zu spät zurück) 『伯爵と尼僧』 (《Graf und Nonne》) ⁵³⁾ 『アールゴイの少女』 (《Die Marguer Liebschen》) ⁵⁴⁾	(8 編) ㊤・㊦ 89-90 ㊤・㊦ 49

- 36) <Es stehen die Stern am Himmel> 『エルク・ペーメ』第1巻596頁。(a)＝出典 ①『マイナート民謡集』 (《Meinert, S. 3》)。Aus dem Ruhländchen 1817. ②またショットキー (Schottk) が口承によるものを蒐集。Aus Steiermark 1820. ③ホフマンが『ムゼウム』に訳載 (《Hoffmann, Brutz' Museum 1852》)。④『エルク』Nr. 24. ⑤『A. ペーター民謡集』 (《A. Peter, I, 199》)。Aus Oesterreichischen. ⑥『エルク』Nr. 24. Aus Meran in Tyrol. ⑦『フルシュカ民謡集』 (《Fruscha, S. 93》)。Aus Bachmen 1891. ⑧『デイトフルト民謡集』 (《Ditfurth, II, Nr. 2》)。Aus Mittelfranken. ⑨口承による。Aus Baden (Merzhausen). ⑩『ミューラー民謡集』 (《Müller, Nr. 95》)。Aus sächs. Erzgebirge. ⑪『シュライヒャー民謡集』 (《Schleicher, S. 112》)。Aus Thüringen (Sonnenberg). ⑫スウェーデン語の民謡としては、『エーリヒ・グスタフ・

Erste Melodie.

Aus Mittelfranken (Ziegelanger) 1856.

(b) 
 Es gieng ein Knab spa - zie - ren - zu sei - ner ge - lieb - ten Braut; her - zigs

 Schap - le, bist du drin - nen? Steh auf und laß mich ein!

Zweite Melodie.

Aus Merzhausen (Baden) 1848.


 Es gieng ein Knabe spa - zie - ren, seins Lieb - chen zum Fen - ster
 Seins Lieb - chen bist du drin - nen? Steh auf und laß mich hi -

 sein,
 nein! Steh auf und laß mich hi - nein!

Sehr mäßig.

Aus Meran. 1852.


 Es gieng ein Knab spa - zie - ren wol am Schlaf - fen - ster hin: ,herz -

 lieb - ste bist du drin - nen? ei steh auf und laß mich ein!

ディー)に合うように変えた。これは ⑩『クレッチマー、ツツカルマリオ民謡集』《Mr. u. Zucc., II, Nr. 60》。これを土台にして ⑪『ブラームスドイツ民謡合唱曲集』《Brahms, Volkslied für Chor, 2 Heft, Nr. 3, 1868》。(c)=題名 „Der tobtie Bräutigam“。ヘルマン (Herrmann), ポガツチング (Pogatsching) がケルンテンより発見。

⑫『ザローンアウスガーベ』《Salon-Ausgabe., S. 52, 1884》。(b)=旋律 (メロディー) 2つ, 1つは Aus Mittelfranken (Ziegelanger) 1856., 今1つは Aus Wetzhausen (Baden) 1848. (c)=口承による。『エルク』Nr. 24. Aus der Gegend von Meran in Tyrol, 1852. (f)=ホフマン・フオン・ファラーズレーベン (Hoffmann von Fallersleben) が, ⑬『ライヒェンバッハ伯夫人歌集』《Liederbuch der Gräfin Reichenbach》より, ⑭『ムゼウム』《'Museum'》え転載。Aus Walldorf bei Meßse 1843. それを ⑮『エルク』Nr. 24, S. 75 に転載。(g)=題名 „Der Freier aus der Todenvelt“。出典 ⑯『ミュラー, エルツ鉱山民謡集』《Müller, Volksl. aus dem Erzgebirge, S. 95, 1883》。類似の民謡は, ⑰『フルシカ・トイシヤー, ボヘミヤ民謡集』《Fuschka und Toischer, böhm. Volksl., S. 93, 1891》。

- 37) <Der steht ein Stat in Osterreich> 『エルク・ペーメ』第1巻530頁。(a)=出典 ①『ウーラント民謡集』《Uhlant, 17 M》, これは ②『低ドイツ民謡集』《Niederb. Liederbuch, Nr. 66, um 1600》より転載。旋律 (メロディー) は, 1540年の『讃美歌合唱曲集』《Souterliedekens》—Souterliedekens Ghemaect ter eeren Gods, op all Psälmen van David: tot stichtinghe ende een gheestelike vermalking van allen Christen menschen. より。(b)=題名 „Nachtigall als Warnerin“。③『ウーラント民謡集』《Uhlant, 17 M》, これは『アントワープ民謡集』《Antwerpner Liederbuch, Nr. 220, 1544》—Een schoon liedekens Boeck in don welcken ghy in viden sult.

Niederl. Ref. 1540, besser 1584 (wie hier).

(a)

Der steht ein Stat in O - ster - rich, de is so wol ge - ste -

ret all mit so man - ni - gen Blöm - sin blau (ja Blöm - sin blau), mit

Mar - mel - steen ge - mü - ret.

(c)

Näch - ten als ich schla - fen gieng, ge - dacht ich an die Vie - be: ich

gieng in mein Schla - f - kām - mer - lein und sah wol im - mer dort 'nū - ber.

(f)

Et sah e - rit wält - fi - felt - chen aw e - nem grä - ne Räst - chen; et

säng dā gan - ge Wäing - ter - nächst, de Stām da mecht em klain - fen.

Veelderhand liedekens. Oude en nyeuwe……, ……Gheprent Thantwerpen. By mi Jan Roulands. Int iaer MDCCCCXLIH.) から独訳。④『スウェーデン民謡集』(《Svenska Volke-Visor, VI, 67-72, Nr. 41》), その独訳 ⑤『モーニケ, 古代スウェーデン民謡集』(《Mohnite, Mischwed. Balladen, Nr. 38, 1836》)。なお, この民謡(民話)は, 民間信仰(迷信)としてオペラにもなったが, それは《Le Loup-garou von L. A. Bertin, Paris 1827》で, オペレッタは, 《Operetten von Ad. Nevelle, Paris 1858》等。(c)=題名 „Nachtigall“。⑥『ニュールンベルクのパンフレット』(《Fug Blätter, Nürnberg, 1550》)。⑦『角笛』4, 209。⑧『エルク』S. 202。(d)=題名 „Gespräch mit der Nachtigall“。⑨『ジムロック』(《Simrock, Nr. 87》)。⑩『エルク』Nr. 58^a。⑨・⑩—Aus der Umgegend von Bonn。(e)=題名 „Goldböglein giebt Geheiß“。⑪『ホフマン民謡集』(《Hoffmann, Nr. 135》)。Aus Schlefien。⑫『エルク』Nr. 58。Aus Schlefien。(f)=題名 „Waldböglein“。『シュスター, ズイーベンブルゲン民謡集』(《Schuster, Siebenbürg. Volksl., Nr. 1》)。Aus Mühlbach。(g)= „Warning“。⑬『角笛』III, 162—シュエロツサー (Schlosser) 提供。口承による。Aus der Gegend von Heidelberg。⑭『アルニムの遺稿』(《Arnim's Nachlaß》)。⑮『エルク』58^b。

- 38) <Es woll ein Mägdlein tanzen gehn,> 『エルク・ペーメ』第1巻536頁。(a)=出典 ①ヘルダー (Herder) の蒐集により『ウーラント民謡集』(《Uhlant, Nr. 25》) に記載。1817年マイナート (Meinert) 及び1820年ツアルナック (Zarnack) も蒐集。(b)=②『ヘルダー民謡集』(《Herder, Volkslieder, I, 1778, S. 109》)。③『角笛』I, S. 192。(c)=④『エルク』Nr. 33。口承による。Aus Schlefien。⑤『ホフマン, シュレジェン民謡集』(《Hofmann, Schlef. Volksl., Nr. 100》)。(d)=⑥『ミットラー民謡集』(《Mittler, 622》)。Aus dem Ruhländchen。⑦『シュレーゲルのムゼウム』(《Schlegel's Museum, Wien 1813, 4 Bde., S. 134》)。(e)=⑧『パリジウス民謡集』(《Parisius, Nr. 15 M》)。——(本稿の筆者) このパリジウスの蒐集は, 100年後の今日, インゲボルク・ヴエー

Fragm. im 19. Quodlib. v. Schmelgel 1544.

(a) Es wollt ein Mägdlein tanzen gehn, sucht Rosen auf der Heide.
Mäßig. Aus Schlefien.

(c) Es wollt ein Mägdlein tanzen gehn, sie schmückt sich wunder-schöne. Was fand sie an dem We-ge stehn? ein' Ha-sel die war grün.
Etwas bewegt. Mel. 1857 aus der Altmark.

(e) Es wollt ein Jungfer zu tanzen gehn, die machte sich so schön, was fand sie an dem We-ge stehn? ein' Ha-sel die war grün.
**

Mäßig. Aus Ganzo in der Ufermark.

(a)

Biemlich bewegt. Rheinländisch. 1890.

(i)

3weite Melodie.

Biemlich bewegt. Westerwald und Eimbürger Gegend 1890.

バー・ケラーマン (Angeborg Weber Stellermann, Marburg Unt.) により 1 冊にまとめられ出版された。従つて出典 ⑧ は、地方の雑誌に掲載されたものである——。(f)＝題名 „Das Mägdlein und der Haselstrauch“。⑨ 『エルク』 Nr. 33。⑩ 『角笛』 4, 350。⑪ 『ファイルメニツシュ, ドイツ民族の声, ドイツ方言の詩・童話・民謡集』 (《Firmenisch, Germaniens Völkertimmen. Sammlung der deutschen Mundarten in Dichtungen, Sagen, Märchen u. Volksliedern, 4 Bde., II, Berlin 1844-66, 633》)。(g)＝題名 „Das Mädchen und der Sagebaum“。⑫ 『エルク』 Nr. 33。Aus der Ufermark。⑬ 『角笛』 4, 354。⑭ 『プレーレ民謡集』 (《Pröhle, Nr. 32》)。(h)＝題名 „Der Sagebaum“。⑮ 『ファイルメニツシュ, ドイツ民族の声』 (《Firmenisch, Germaniens Völkertimmen, II, S. 187》)。(i)＝題名 „Mädchen und Vorbeerbaum“。⑯ 『ベッケル, ラインの民謡の泉』 (《Becker, Rhein. Volksliederborn, 1892, Nr. 19》)。(j)＝題名 „Aus Gornhausen an der Mosel“。⑰ の旋律 (メロディー) と違ふ旋律 (メロディ) のものは、ヴォルフラム (Wolfram) により蒐集。Aus der Westerwald und Eimbürger Gegend 1890。

- 39) <Die niederländischen Mägdlein die giengen früh ins Gras> 『エルク・ペーメ』 第 1 巻 251 頁。(a)＝出典 ① 『フォルスター民謡集』 (《Forster, II, 1540, Nr. 11》)。(2) 『ウーラ

Mel.: Nun ist es doch kein reuter. Forster II. 1540. Nr. 11.

(a)

ント民謡集』《Uhländ, 112》。③『エルク』37^c——④と同じもの——。④『鉾山の民謡集, 1730年』《Vergliederbüchlein, Nr. 85》——⑤と同じもの——。⑤『ウーラント, 古代ドイツ民謡』《Uhländ, Mitd. Niederh., Nr. 86》。⑥『角笛』4, 62 及び 21, 30 と 3, 23。⑦『エルク』1, 6, Nr. 12, Nr. 17 及び 8, 127——但し③と異なるもの——。⑧『マイナート民謡集』《Meinert, S. 199》。⑨『エルラッハ民謡集』《Erlach, 4, 287 及び 4, 105》——前者は⑧と同じもの——。⑩『フィルメニッシュ, ゲルマン諸民族の声』《Stimmenfisch, Germaniens Völkerstimmen》——⑧と同じもの——。⑪『マイアー民謡集』《Meier, Nr. 185-6》。⑫『ディトフルト民謡集』《Dittfurth, II, 54》。⑬『クレッチマー・ツツカルマリオ民謡集』《Nr. u. Zucc., I, Nr. 237》。⑭『ジムロック民謡集』《Simrock, 59》。⑮『ヴォルフ・神話学雑誌』《Wolff's Zsch. f. Mythol., I, 228》。⑯『ヴォルフ, 諸民族の会堂』《D. Wolff, Halle der Völker, 2, 194》。⑰『ミットラー民謡集』《Mittler, Nr. 282-284》。⑱『ヴォルフ, エーゲルラント民謡集』《M. Wolff, Egerland, 38》。⑲『シュライヒャー民謡集』《Schleicher, S. 123》。⑳『ペーター民謡集』《M. Peter, 235》。㉑『トープラー民謡集』《Tobler, I, 139, II, 207》。㉒『シェーラー, ユングブルンネン』《Scherer, Jung., Nr. 150》。㉓『シュテプラー, アルザス史雑誌』《Stöber, Alsatia, 1855, S. 170》。㉔『ペーメ民謡集』《Böhme, B. L., 1891, S. 138》。㉕『レヴァルター, 低ヘッセン民謡集』《Sewalter, B. L. aus Niederhessen, I, 26》。(b)=題名 „Der blaue

Alte Melodie, mit Taktwechsel.

äolisch. Baseler Schr. 1544.

(b) 

Schwäbische Melodie.

Leutg. Mündlich von Dr. Birlinger. (1888 vorgesungen).



Bairische Melodie.

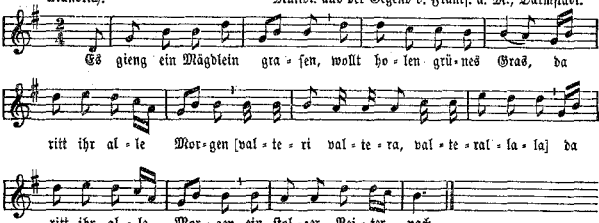
Dittfurth II. 63.



Fragm. der Mel. 1622.

(c) 

Mündl. Aus der Gegend v. Frankfurt a. M., Darmstadt.

(b) 

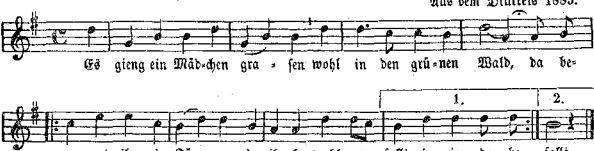
Es gieng ein Mägdlein gra - sen, wollt ho - len grü - nes Gras, da
ritt ihr al - le Mor - gen (val - te = ri val - te - ra, val - te - ral - la - la) da
ritt ihr al - le Mor - gen ein stol - zer Rei - ter nach.

Anderer Lesart. Aus der Gegend von Marburg, 1890.



Es gieng ein wack - res Mäb - chen früh - mor - gens in das Gras, da
ritt ihr al - le Mor - gen, ein stol - zer Rei - ter nach, juch - he! da
ritt ihr al - le Mor - gen ein stol - zer Rei - ter nach.

Dritte Lesart. Aus dem Dillkreis 1885.



Es gieng ein Mäb - chen gra - sen wohl in den grü - nen Wald, da be -
geg - net ihr ein Zä - ger, der ihr so wohl ge - fällt, ja, ja, da be - fällt.

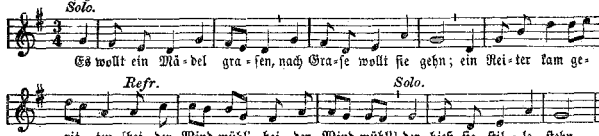
Storch“. 16 世紀にエルザス、スイスで流布していた。旋律 (メロディー) のうち最古のものは、②⑤ 手稿『バーゼラー・テノール』《Baseler Tenor, 1544》に。②⑥『ウーラント, 古代ドイツ民謡』《Upland, Mitb. Niederb., Nr. 87》。②⑦『フィツシャルト, 稗史』《Fischart, Geschichte d'itterung, 1536, Nr. 10》。(b) の旋律 (メロディー) 3 曲『エルク・ペーメ』第 1 巻 253 頁。(c) = 題名 „Curante Margretchen“。②⑧『角笛』

Gemäschlich. Aus Meran (Tyrol), 1893.

(e) 

Es gieng ein Mäb - chen Gras - schnei - den, Grasschneiden wollt sie gehn, be -
geg - net ihr ein Fäb - de - rich und heißt sie stil - le stehn, stehn.

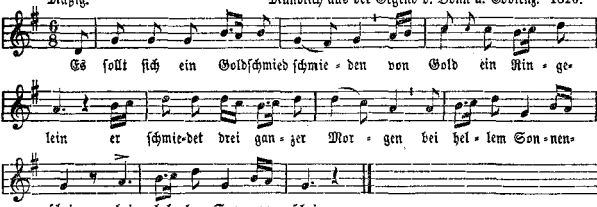
Mäsig. Solo. Schöne Mel. aus Schlesien.

(f) 

Es wollt ein Mä - del gra - sen, nach Gra - se wollt sie gehn; ein Rei - ter kam ge -
rit - ten [bei der Wind - müß!], bei der Wind - müß! der hieß sie stil - le stehn.

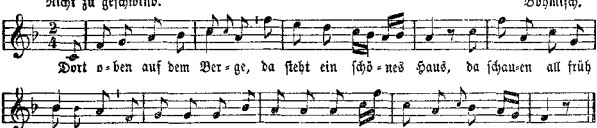
4, 62. ②『エルク』S. 127. (b)=題名 „Graferin und Reiter“. ③『エルク』Nr. 37. 口承による。Aus der Gegend von Frankfurt a./M. und Darmstadt. Aus Oberheffen (Marburg) u. dem Dillkreise um 1885. —ヴォルフラム (Wolfram) 蒐集. (c)=題名 „Graferin und Fährerich“. ④『エルク遺稿』《Gef's Nachlaß》. Aus Meran (Tyrol) 1853. ⑤『ヴォルフ, 神話学雑誌』《Wolf's Zicht. f. Myth., I, 228》. (f)=題名 „Grafsmagd und Reiter“. ⑥『ホフマン, シュレジエン民謡集』《Hoffmann, Schles. B. L., S. 275》. ⑦『A・I・アルウィドソン, スウェーデン民謡集』《A. I. Arwidson, Svenska Fornsånger. En samling af Kämpvisor, Folkevisor, Lekar, Dansar, Barn- och Vall-Sånger, utgifne af Adolf Iwar Arwidson. Stockholm, 1834, III, 271》——独訳テンナー (Tenner, 1860). (g)=題名 „Der Goldschmied und das Mädchen“. ⑧『エルク』Nr. 37⁶. 口承による。Aus Rhein (Bonn, Coblenz). また 1820 年, ファーラーズレーベン (H. v. Fallerleben) 蒐集. (h)=題名 „Des Bergmanns Lieb“. ⑨『ルシカ・トイシャー, ベーメン民謡集』《Hurschka und Töschner, Deuts. B. L. aus Böhmen, 1891》。

Mäßig. Mündlich aus der Gegend v. Bonn u. Coblenz. 1820.

(a) 

Es sollt sich ein Goldschmied schmie - den von Gold ein Rin - ge -
lein er schmie - det drei gan - zer Mor - gen bei hel - lem Son - nen -
schein, bei hel - lem Son - nen - schein.

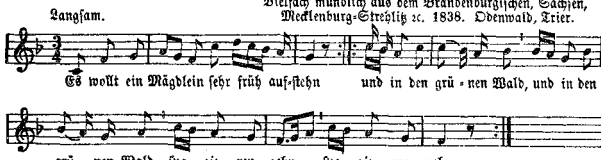
Nicht zu geschwind. Böhmisches.

(b) 

Dort o - ben auf dem Ber - ge, da steht ein schö - nes Haus, da schau - en all früh
mor - gen (vom traf - la - la zum traf - la - la) drei jun - ge Berg - leut' raus.

- 40) <Es sollt ein Weiblein früh aufstehn,> 『エルク・ペーメ』第1巻342頁。(a)=出典 ①『エルク』34⁸. —これは、1536年の《Bergreuen, Wolf Meyerphech》から転載。(a)=出典 ②『ウーラント民謡集』《Uhlant, 93 M》. ③『ホフマン, オランダ民謡集』《Hoffmann, niederl. B. L., 38: De Hollandsche Bazn, 1719》. (b)=④『鉱山の民謡集, 1530年』《Bergliederbüchlein, Nr. 114》. ⑤『ウーラント民謡集』《Uhlant, 93 B》. ⑥『エルク』34¹. (c)=題名 „Der verwundete Knecht“. ⑦『ヘルダー民謡集』

Langsam. Vielsach mündlich aus dem Brandenburgischen, Sachsen, Mecklenburg-Strelitz zc. 1838. Dönnwald, Triet.

(c) 

Es wollt ein Mägdlein sehr früh auf - stehn und in den grü - nen Wald, und in den
grü - nen Wald spa - zie - ren gehn, spa - zie - ren gehn.

(《Herder, B. 2., I, 1778, S. 118》). (d)=題名 „Die verbundene Dame“. ⑧『エルク』34^b. Aus Thüringen Frankenhausen, Meiningen). ⑨『シェーラー, ユングブルンネン』(《Scherer, Zungbr., 22 B》). ⑩『フィンク, 家庭詩歌撰集』(《Fink, Hausschatz》). ⑪『ヘルテル, 歌謡事典』(《Härtel, Niederlegikon》). (e)=題名 „Die verwundete Dame“. ⑫『エルク』S. 112, Nr. 34^a. (f)=題名 „Der verwundete Knabe“. ⑬『エルク』Nr. 34^c. 口承による。Aus dem Odenwald u. Bergstraße, Taunus (Wilrges). ⑭『ベッカー, ライン民謡集』(《Becker, Rhein. Liederb., Nr. 8》). (g)=題名 (f)と同じ。⑮『ミットラー民謡集』(《Mittler, Nr. 51》). Aus Hessen. (h)=題名 (e)と同じ。⑯『エルク』S. 113, Nr. 34^b. (i)=題名 „Zwei Leidtragende“. ⑰『鉾山の民謡集, 1730年』(《Bergliederbüchlein, Nr. 114》). ⑱『ウーラント, 古代ドイツ民謡集』(《Uhlant, 93 Mtb. Bbb., Nr. 42》). ⑲『角笛』4, 68. ⑳『ヘルダー民謡集』(《Herder, I, 118》).

Ältere Lesart.

Vor 1808.

(c)

Langsam.

Aus Thüringen und Sachsen.

(b)

Langsam.

Mündl. aus Schlessien (Gaimar, Graustadt etc.)

Mäßig langsam.

Aus dem Odenwald und von der Bergstraße. 1840.

(f)

Andere Lesart.

Aus dem Taunus, 1875 u. vom Rhein, 1890.

⑨ *Etwas langsam.* *Aus der Rahmgegend und dem Dillkreid.*
 Es woll - te ein Mä - ßen wohl früh auf - stehn, wollt durch den
 grü - nen Wald, wollt durch den grü - nen Wald spa - zie - ren gehn.

⑩ *Langsam.* *Aus der Ufermark.*
 Es wollt ein Jä - ger früh auf - stehn und in den grü - nen Wald, und in den
 grü - nen Wald spa - zie - ren gehn.

- ②『ホフマン、シュレジエン民謡集』(《Hoffman, Schles. B. L., Nr. 167》)。②『ディ
 トフルト民謡集』(《Dittfurth, II, 31, 32》)。③『クレッチマー・ツッカルマリオ民
 謡集』(《Nr. u. Zucc., I, 56》)。④『ジムロック民謡集』(《Einrock, 61》)。⑤『プレー
 レ民謡集』(《Bröhle, 12》)。⑥『フィートラー民謡集』(《Fiedler, 188》)。⑦『フィン
 ク、家庭詩歌撰集』(《Fink, Haussch., Nr. 844》)。⑧『エルク』I, 4, 31 u. 34。⑨『ミ
 ットラー民謡集』(《Mittler, S. 43-47, 51, 52》)。⑩『ベッケル民謡集』(《Böckel, Nr.
 33》)。⑪『トープラー民謡集』(《Tobler, I, Nr. 107》)。⑫『シェラー、ユングブル
 ンネン』(《Scherer, Jungbr., Nr. 22》)。⑬『マイアー民謡集』(《Meier, 314》)。⑭『エ
 ルラッハ民謡集』(《Erlach, I, 152》)。⑮『テレーゼ、ゲルマン諸国民謡の歴史的
 性格描写の試み』(《Teresa Albertine Luise von Jacob, verehel. Robinson, Versuch einer
 geschichtlichen Charakteristik der Volkslieder der germanischen Nationen, 1840》)。
- 41) <Es sollt ein Jungmagd früh aufstehen,> 『エルク・ベーム』第1巻435頁。出典 ①『ツ
 ールミューレン(ノレンベルク)、低地ライン民謡集』(《Zurmühlen (Norrenberg), Nieder
 rhein. B. L., Nr. 16》)。Aus Dülken, Grefrath und Süchteln. ②『ノレンベルク、デュ
 ルケンの年代記』(《Norrenberg, Chronik von Dülken, S. 197》)。③『シュペー、ケル
 ンの民俗』(《Spee, Volkstümliches aus Köln, 1875, S. 7》)。この歌は非常に古く15世

Langsam. *(Replid vom Niederrhein).* *Mel. aus Niederträchten 1880.*
 Doa sau en jonge Moad freug op - stoon, doa sau en jonge Moad freug op - stoon.
 soe sau som gru - ne Wald hen - ge goan.

Andere Lesart. *Mel. aus Koblenz 1850.*

Männer: *Weiber:*
 Es wollt ein Jung - magd früh auf - stehn, es wollt ein Jung - magd früh auf - stehn,
 sie sollt zur Wie - ße mä - ßen gehn, sie sollt zur Wie - ße mä - ßen gehn.

紀に存在した。

- 42) <Zu Braunschweig stehet ein Castell,> 『エルク・ペーメ』第1巻341頁。出典 ①『アントワープオランダ民謡集』(《Antwerpner niederl. Ldb., 1544, Nr. 151》)。②『ホフマン、雑誌ホラエ・ベルギカ記載』(《Hoffmann p. 8., Hor. belg. II, Nr. 17》)。③『ウーラント民謡集』(《Umland, 92》)。
- 43) <Nun ade, mein herzlich Schätzlein,> 『エルク・ペーメ』第1巻606頁。(a)=出典 ①『ロングヴァルト、古代ラインの夢と歌謡』(《Longard, Altrheinische Märlein u. Lieblein, S. 99》)。②『フィルマール民謡集』(《Wilmar, 155》)。③『シェーラー、ユングブルンネン』(《Scherer, Jungbr., Nr. 130》)。Aus Schwarzwald. 口承による。④『角笛』III, 15。⑤『レワルター、低地ヘッセン民謡集』(《Revalter, B. 2. aus Niederhessen, III, 14》)。⑥『マイアー民謡集』(《Meier, S. 399》)。⑦『キュンツェル民謡集』

Langsam. Umgegend von Kassel (Revalter III, 14).

(a) 

Nun a = de, mein herz-lich Schätz-lein, jetzt muß ich schei-den von dir bis
auf den an-bern Som-mer, dann komm ich wie-der zu dir.

Aus dem Oberlahnkreis, Kreis Limburg und Schöffheim.

(b) 

Es la-gen zwei ver-lor-en in ei-nem Ge-der-beit, bis
auf den hei-len Mor-gen, bis daß die Sonn auf-geht.

- (《Münzel, S. 365》)。(b)=題名 „Feindesliebe im Grabe“。口承による。Aus dem Nassauischen u. Oberhessen. ⑧『ベッケル民謡集』(《Böckel, Nr. 70》)。⑨『キュンツェル、ヘッセン史』(《Münzel, Gesch. von Hessen, S. 565》)。⑩『ホッカー、モーゼルラントの歴史と民話』(《Höcker, Geschichten und Sagen des Mosellandes, 1852》)。(c)=題名 „Liebes im Grabe“。⑪『コーゼマーカー民謡集』(《Couffemaeker, Nr. 58》)。Aus dem Namtlandschen. ⑫旋律(メロディー)のみ 1860 年、オランダ・エルペルフエルトにてクレツェリウス(Prof. Creelius)蒐集。⑬題名 „Stimme der Mutter aus dem Grabe“。⑭『ミューンデル民謡集』(《Mündel, Nr. 34》)。Aus der Umgebung von Straßburg.
- 44) [G.B. 113] 題名 „Schütz dich, Gretlein!“。<„Nun schütz dich, Gretlein, schütz dich“,> 『エルク・ペーメ』第1巻413頁。出典 ①『フォルスター民謡集』(《Forster, III, 1949, Nr. 66》)。②『角笛』III, 46, 49。③『ウーラント民謡集』(《Umland, 256 W》)。④『パンフレット第8束=エルク・ペーメの整理による』(《Flug Blätter 8》)。——(イ)クネグント・ヘルゴートイン(Kunegund Hergotin), ニュールンベルク, 1528 年~36 年。(ロ)マテウム・フランヒェン(Matheum Francken), アウグスブルク, 1560 年頃。⑤『鉱山の民謡集, 1740 年』(《Bergliederbüchlein, Nr. 109》)。

[G.B. 114] 題名 „Die verstorbenen Kleider“。<Auf Erden, auf Erden, auf Erden zu aller Stund,> ⑥『ジムロック民謡集』(《Simrock, Nr. 56》)。Aus Menzenberg u. Kessentich von Bonn. 口承による。

a. Süddeutsche Melodie.

Nach Forster III. Nr. 66. Taktart v. 2.

Nun schütz dich, Getreidelein, schütz dich, du mußt mit mir dar
von! Das Korn ist abge-schnitten, der Wein ist
eingegethen, der Wein ist eingegethen.

Original.

Forster III. 1549. Nr. 66.

b. Norddeutsche Melodie.

J. Eccard, Neue Lieder 1599, Nr. 22.

Nun schütz dich, Getreidelein, schütz dich, du mußt mit mir davon! Das
Korn ist abge-schnitten, der Wein ist eingegethen, der Wein ist eingegethen.

c. Fragment.

M. Brand, Musikal. Grillenvertreiber 1622, Nr. 2.

Schütz dich, Getreidelein, schütz dich, du mußt mit mir davon.

Erste Lesart.

Etwas bewegt.

Vom Rhein. Text nach Simrock.

Auf Erden, auf Erden, auf Erden zu aller Stund, ach
Schütz dich, du bist meine, und ich und ich bin deine, drum
trag, drum trag, drum trag mit mir Geduld!

Andere Lesart.

Reicht bewegt.

Aus Westfalen.

Auf Erden, auf Erden, auf Erden allezeit, Schütz
du bist mein und ich bin dein! O du schwarzbraunes Augelein, und
hab, und hab, und hab mit mir Geduld.

(a) *Fröhlich.* *Aus dem Rahn- u. Dillkreis u. vom Rhein. 1880.*



(b) *Sehr mäßig.* *Aus Langenberg (Bergisch).*



- [G・B 115] (a)=題名 „Der Schlemmer“. 〈Ich stand auf hohem Berge und schaut ins tiefe Thal,〉 Aus dem Rahn und Dillkreis u. vom Rhein. 口承による。(b)=題名 (a) と同じ。⑦『エルク』遺稿。⑧『エルク』II, 6, 50。——これはホフマン (Hoffmann) がボン近郊ポッペルスドルフから1820年に蒐集。⑨『エルク』I, 2, 14。⑩『ミュンスター歴史と伝説』(《Münstersche Geschichten u. Legenden, 1825, 253》)。⑪『ジムロック民謡集』(《Simrock, Nr. 57》)。⑫『ホフマン, シュレジエン民謡』(《Hoffmann, Schles. B. G., Nr. 127 u. 128》)。⑬『エルペルト, 古代民謡の遺産』(《Elwert, Ungedruckte Reste des alten Gesanges, 1784, 37》)。⑭『ビュッシング民謡集』(《Büsching, Nr. 82》)。⑮『マイナート民謡集』(《Meinert, 68》)。⑯『エルラッハ民謡集』(《Erlach, I, 170》)。⑰『エルク』III, 92。⑱『マイアー民謡集』(《Meier, 361》)。⑲『ヴォルフ, 諸民族の会堂』(《Wolff, Halle der Völker, II, 196》)。⑳『ミットラー民謡集』(《Mittler, 220-223》)。㉑『デイトフルト民謡集』(《Ditt., II, 30》)。㉒『ミューラー民謡集』(《Müller, S. 81》)。㉓『トープラー民謡集』(《Tobler, I, S. 95》)。㉔『ベッケル民謡集』(《Böckel, Nr. 93》)。㉕『レヴァルター民謡集』(《Revalter, II, 16》)。
- 45) 〈Es wollt ein Mädel wol früh aufstehen,〉『エルク・ペーメ』第1巻432頁。(a)=出典 ①『J・G・ブュッシング, 週報』(《J. G. Büsching, Wöchentliche Nachrichten, IV, Bd., Breslau 1819, S. 85》)。Aus Oesterreich. ②『クレッチマー・ツッカルマリオ民謡集』(《Nr. u. Zucc., I, 1840, Nr. 35》)。(b)=多くの口承民謡が存在する。③『エルク』Nr. 144 u. I, 2, 55。Aus dem Gleibischen (Gartrop), Bayern (Amorbach), Hesse (Darmstadt), fischen, Thüringen, Vorpommern, Schlesien, Bergischen u. Brandenburgischen. ④『角笛』II, 206。⑤『ヴォルフ, 諸民族の会堂』(《Wolff, Halle der Völker, II, 190》)。⑥『ブュッシング, 週報』(《Büsching, Wöchentliche Nachrichten, 4, 85》)。Aus Oesterreich. ⑦『クレッチマー・ツッカルマリオ民謡集』(《Nr. u. Zucc., I, S. 55》)。⑧『エルク』I, 6, 47。⑨『エルラッハ民謡集』(《Erlach, 3, 58》)。⑩『ミットラー民謡集』(《Mittler, 305》)。Aus Schlesien→⑪『ホフマン民謡集』(《Hoffmann, S. 204 u. 206》)。Vom Rhein→⑫『ジムロック民謡集』(《Simrock, S. 311》)。⑬『ツールミューレン民謡集』(《Zurmühlen, Nr. 85》)。Aus Thüringen→⑭『シュライヒアー民謡集』(《Schleicher, S. 123》)。⑮『シャーデ民謡集』(《Schade, Nr. 5》)。Aus Schwaben→⑯『マイアー民謡集』(《Meier, 169》)。Aus Franken→⑰『デイトフルト民謡集』(《Ditt., II, 46》)。Aus

Erste Melodie.

Österreichisch, vor 1819.

(a) Mäßig.

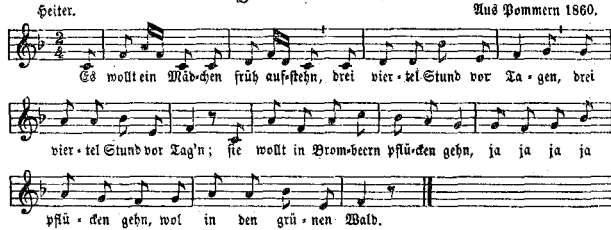


Es wollt ein Mädl wol früh auf- stehn, drei- vier- tel- Stund vor Tag;
wollt in den Wald spa- zie- ren gehn, hyn hm hyn spa- zie- ren gehn und
Brom- beer bro- den ab.

Zweite Melodie.

Aus Pommern 1860.

Feiter.



Es wollt ein Mä-chen früh auf- stehn, drei vier- tel- Stund vor Ta- gen, drei
vier- tel- Stund vor Tag'n; sie wollt in Brom- beern pflü- den gehn, ja ja ja ja
pflü- den gehn, wol in den grü- nen Wald.

Dritte Melodie.

Aus Schleswig 1891.

Feiter.



Es wollt ein Mä-chen früh auf- stehn drei Vier- tel- stun- de vor Tag.
Sie wollt in Wald spa- zie- ren gehn, ju- li- a ju- li- a
zie- ren gehn, bis daß der Tag an- brach.

Aus dem Giesichen und Dabrischen (Amorbach).

(b) Mäßig.



Es wollt ein Mägd- lein früh auf- stehn, drei- vier- tel- Stund vor Tag,
wollt in den Wald spa- zie- ren gehn, hei- ja- ja, spa- zie- ren gehn, und
*Amorbach,
Brom- beern pflü- den ab. val- la- te- ri.

Steiermark-→⑮『ローゼンガ-民謡集』(《Rossegger, Nr. 17》)。⑩『シュロツサール民謡集』(《Schlossar, S. 305》)。Aus Kärnten-→⑳『ボガツチニヒ民謡集』(《Bogatschnigg, Nr. 196》)。㉑『クレッチマー・ツッカルマリオ民謡集』(《Mr. u. Bucc., II, 63》)。㉒『ブレーレ民謡集』(《Pröhle, S. 76》)。㉓『ベッケル民謡集』(《Böckel, Nr. 56》)。㉔『ペーター民謡集』(《Peter, S. 286》)。㉕『シェーラー, ユングブルンネン』(《Scherer, Jungbr., Nr. 54》)。㉖『K.ベッカー, ライン民謡集』(《K. Becker, Rhein. Niederb., Nr. 72》)。Niederdeutsch-→㉗『エルク』II, 6, 18。(c)=題名, „Die

Brombeerbrockerin“. ②『シュロッサール, シュタイアーマルクト民謡集』(《Schoffar, Steir. Volksl., Nr. 305》)。

- 46) <Es war ein reicher Schächtersmann zu Kolberg an Grunheide,>『エルク・ペーメ』第1巻 428頁。(a)＝出典 ①『エルク』I, 6, 5。Aus Wirtenwerder bei Dranienburg im (Brandenburgischen) u. Potsdam. ②『ウーラント, 山の歌』(《Umland, Bergl., 271》)。(b)＝③

Etwas bewegt. Brandenburgisch.

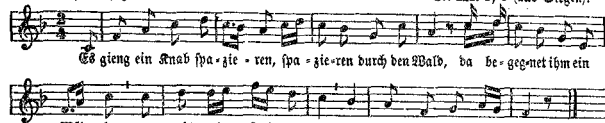
(a) 

Es war ein rei - cher Schächters - mann zu Kol - berg an Grun - hei - de,
der hatt' ein ein - zigß Töch - ter - lein und die schief gang al - tei - ne.

『ジムロック民謡集』(《Simrock, Nr. 63》)。口承による。(c)＝題名 „Entführung durch einen Reiter“。④『マイナート民謡集』(《Meinert, Nr. 93》)。(5)『ミットラー民謡集』(《Mittler, 343》)。(b)＝題名 „Das Straßburger Mädchen“。⑥『アルニム, 1790年～1800年の蒐集ペンフレット』(《Arnim, H. Bl. um 1790-1800》)。(7)『角笛』I, 5, 538。(c)＝題名 „Der verlorne Schuh“。⑧『流行歌と騎士の歌』(《Gassenhauer u. Reiterlieder, II, Nr. 4, c. 1536》)。

- 47) <Es gieng ein Knab spazieren>『エルク・ペーメ』第1巻 451頁。旋律(メロディー) 3

Sehr mäßig. Norddeutsche Melodie. Geß III. 1, 5 (aus Siegen).

(a) 

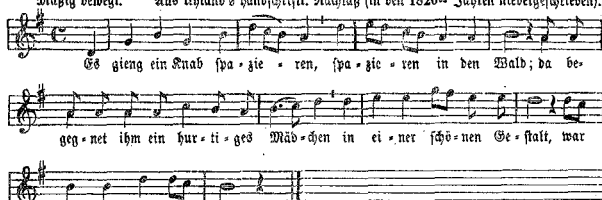
Es gieng ein Knab spa - zie - ren, spa - zie - ren durch den Wald, da be - gegnet ihm ein
Mäd - chen, war acht - zehn Jah - re alt, gar schön war sie ge - statt.

Mäßig. Schlesische Melodie. Hoffm. Nr. 36.



Es gieng ein Knab spa - zie - ren, spa - zie - ren in den Wald. Da be -
geg - net ihm ein Mäg - de - lein, war acht - zehn Jah - re alt, war
schön und wohl - ge - statt, war schön und wohl - ge - statt.

Mäßig bewegt. Württembergische Melodie. Aus Umland's handschriftl. Nachlaß (in den 1820er Jahren niedergeschrieben).



Es gieng ein Knab spa - zie - ren, spa - zie - ren in den Wald; da be -
geg - net ihm ein hur - ti - ges Mäd - chen in ei - ner schö - nen Ge - statt, war
acht - zehn Jah - re alt.

曲。(イ) 北ドイツメロディー、出典 ①『エルク』III, 1, 5 u. 56。(ロ) シュレジェンから2曲, ②『ホフマン民謡集』(《Hoffmann, Nr. 36》)。(ハ) ヴェルテンベルク, ③『ウーラント、遺稿』(《Uhlant's handschriftl. Nachlaß》)。(a)=④『角笛』II, 189。⑤『ペーター、オーストリア・シュレジェン民謡集』(《Peter, Volksl. aus Oesterr. Schlesien, 1865, S. 196》)。(b)『ヴァルター民謡集』(《Walter, 64》)。(c)『ディートフルト民謡集』(《Ditfurth, II, 36》)。(d)『マイアー民謡集』(《Meier, 321》)。(e)『ミューレンホフ、大公国シュレスビヒ・ホルシュタインの民話、童話及び歌謡』(《R. Mühlendorff, Sagen, Märchen u. Lieder der Herzogthümer Schleswig-Holstein, 609》)。(f)『ジムロック民謡集』(《Simrock, 113》)。(g)『ミットラー民謡集』(《Mittler, 192》)。(h)『シエラー、ユングブルンネン』(《Scherer, Jungbr., 36》)。(i)『クレッチマー・ツッカルマリオ民謡集』(《Mr. u. Zucc., Nr. 53》)。

- 48) <Es steht ein Lind in jenem Thal,>『エルク・ペーメ』第1巻236頁。G-B 67 には、(a)~(f)の6編がまとめられている。このうち『愛の試煉』(Liebes-Probē)という題名の民謡は、(b)~(f)の3編で、(a)は『菩提樹の下』(Unter der Linde)、(b)は『ためされた忠実さ』(Geprüfte Treue)、(c)は『谷の菩提樹』(Die Linde im Thal)という題名である。(a)=出典 ①『ウーラント民謡集』(《Uhlant, Nr. 116》)。(b)『オットティリエ・フェンヒレリン、手書の民謡集』(《Ottlie Fenchlerin, Geschriebenes Liederbuch, 1592, Bl. 59》)。(c)『ウーラント、古代ドイツ民謡』(《Uhlant, Altd. Liederb., 39》)。(d)『リリエンクローン、ドイツの生活』(《Liliencron, deutsches Leben, Nr. 142》)。(e)『フィルマル民謡集』(《Silmar, 204》)。(b)=⑥『エルク』S. 3。(c)=⑦『角笛』4, 3。(d)『パンフレット、1760年』(《Fl. Bl. um 1700》)。(e)=⑨『エルク』Nr. 1。(f)=H-G-ヴォルフラム (S. G. Wolfram) が低地ナイセンから1880年に蒐集。(g)=ホフマン・フォン・

Nen gheender linden daer staet een dal. Souterliedekens 1540. Nr. 38.

(a)
Es steht ein Lind in je-nem Thal, ist o-ben breit und un-ten schmal, da-
rauf da siet Frau Nid- ti- gält und an-dre Bög- tein in dem Wald.

Häufig. Durch ganz Deutschland bekannt, zuerst gedruckt 1807.

(c)
Es stand eine Lind' im tie-sen Thal, war o-ben breit und un-ten schmal, war
o-ben breit und un-ten schmal. Bar. 1807.

Unterlathkreis.

(b)
Es stand ein Baum im Wie-sen-grund, war o-ben spiz und un-ten rund, war
o-ben spiz und un-ten rund.

Mel. altniederländisch. Text deutsch.

(f) 

ファラースレーベン (H. von Gallersleben) がボンから 1820 年に蒐集。⑩『雑誌・アレマニア』(『Ztschr. Germania, 1877, S. 284』)。(f)=⑪『ホフマン、棄てられた子供ら』(『Hoffmann von Gallersleben, Findlinge, S. 366』)。この歌は由来が古く、エルク・ベームは次のように述べているが、この精査は DM の大きな課題となるであろう。»Die Linde im Thal oder die „Liebesprobe“ ist eins der schönsten und weitverbreitetsten deutschen Volkslieder, dessen Alter bis ins 15 Jahrh. zurück reicht u. des noch jetzt zuweilen gesungen wird. Das bezeugt folgende Litteratur-Uebersicht:

A. Alte Text: *)

B. Aus Volksmund: **)

C. Ausländisch: ***)

Ein unwillkürliches Urtheil über das edle Lied, das alle Litteraturhistoriker u. Dichter hochschätzten und das deutsche Volk über 400 Jahre liebte, fällt Goethe, wenn er in seiner Rec. zum Wunderhornbuche sagt: „Im besten Handwerkersbüchsenstich u. auch trefflich gemacht.“ Ganz anders spricht Wilmars über dieses Lied, das eine großartige und bewährte Probe von Liebestreue einer Braut schildert.—Die poetischen Schönheiten darin hebt R. v. Sittencron (Deutsches Leben im Volksl. Einl., S. 69) trefflich hervor: „Wir hörten von ‚einer Linde im tiefen Thal‘, darauf da sitzt Frau Nachtigall, die brachte einst Botschaft u. goldenen Ring. Da wieder unter der Linde standen sie ja auch, Als der traurige Abschied genommen werden mußte u. er versieß so gewißlich wieder zu kommen. Der Sommer gieng hin und er kam dennoch nicht; und wiederum sitzt sie sinnend und harrend unter der Linde—und er kam! Wie tief begründet im deutschen Gemüth dies Ideal höchster Frauenliebe ist, welche sich in den Willen des Geliebten demüthig u. segnend beugt, auch wo sich von ihm verstoßen wähnt; das spiegelt sich wieder an der Treue, mit der das deutsche Volk an diesem Liede hängt, welches es noch heute singt. Es ist derselbe Zug, der in der Geschichte der Griselidis zu tragischer, ja grausamer Höhe gesteigert wurde.“—Die Novelle Griselidis von Boccaccio wurde im 15 Jahrh. (1471) verdeutscht u. vielfach gedruckt; eine Entlehnung ist für das deutsche Lied nicht zu erweisen. Chamisso in seinem Gedichte „Liebesprobe“: „Es wiegt die alte Linde“ hat unser schönes Volkslied bearbeitet.«

*) 略

**) ①『角笛』I, S. 61. ②『ビュンツ及びハーゲン民謡集』(『Büsching u. Hagen, Volksl., 1807, S. 93』). ③『エルク』I, 1, 30. ④『ツアルナック民謡集』(『Zarrack, I, Nr. 40』). ⑤『フイック家庭詩歌撰集』(『Fink, Hauschatz』). ⑥『クレッ

チマー・ツッカルマリオ民謡集』(《*Fr. u. Zucc.*, I, 44》)。⑦『マイナート民謡集』(《*Meinert*, 234》)。⑧『エルラッハ民謡集』(《*Erlach*, 3, 40》)。⑨『ラインの童話とミューンスター史』(《*Rhein. Märlein u. Münstersche Gesch.*, 206》)。⑩『エルク』II, 1, 57。
 ⑪『ホフマン民謡集』(《*Hoffmann*, Nr. 22》)。⑫『ジムロック民謡集』(《*Sinrock*, Nr. 84 u. 85》)。⑬『マイアー民謡集』(《*Meier*, S. 287》)。⑭『デイトフルト民謡集』(《*Ditt.*, II, 22》)。⑮『ペレーレ民謡集』(《*Pröhle*, S. 29》)。⑯『ミットラー民謡集』(《*Mittler*, Nr. 56》)。⑰『フィートラー民謡集』(《*Fiedler*, 147》)。⑱『ケーラー民謡集』(《*Köhler*, S. 299》)。⑲『シャーデ民謡集』(《*Schade*, Nr. 4》)。⑳『シュスター民謡集』(《*Schuster*, 56》)。㉑『シェーラー, ユングブルンネン』(《*Scherer, Jungbr., Nr. 2*》)。㉒『パリジウス, ドイツチエス・ムゼウム』(《*Parifius, deutsches Museum*, 1857, Nr. 19》)。㉓『ペーター民謡集』(《*Peter*, S. 179》)。㉔『シュミッツ, 風俗』(《*Schmitz, Sitten*, S. 161》)。㉕『ライファアーシャイト民謡集』(《*Reifferscheid*, Nr. 13》)。㉖『フイルメニッシュ民謡集』(《*Firmenisch*, II, 236, III, 530 u. Anh. 768》)。㉗『ミューレンホフ民謡集』(《*Müllenhof*, S. 481》)。㉘『ミューラー民謡集』(《*Müller*, 481》)。㉙『フルギ民謡集』(《*Fugt*, S. 53》)。㉚『ツァヒョービチ, 花嫁の言葉』(《*Stachovichs, Brautsprüche*, 234》)。其他, 30 以上の方言による同一民謡(勿論変種もある)が, 『エルク』I に収められた。

*** (イ) オランダ語。㉛『雑誌ホラエ・ベルギカ所収』(《*Hor. belg.* II, Nr. 26》)。㉜『ヴィレムス民謡集』(《*Willems*, S. 219》)。㉝『ロートゼン民謡集』(《*Rootsen*, S. 92》)。㉞『ヴォルフ, 諸民族の会堂』(《*Wolff, Halle d. V.*, I, 153》)。(ロ) スラブ語。㉟『ハウプト及びシュマラー, ヴェント民謡集』(《*Haupt u. Schmaier, Wendische B. L.*, I, 15, 170 u. II, 15》)。㊱『ゲッツェ, ロンヤ民族の声』(《*Geitze, Stimmen der russische Völker*, Nr. 71》)。㊲『ヴェンツィヒ, 西スラヴの童話集』(《*Wenzig, westslaw. Märchenschatz*, 248》)。(ハ) デンマーク語。㊳『グリム, 古代デンマークの英雄詩』(《*Grimm, altdän. Heldentlieder*, S. 213》)。㊴『グルンドビヒ民謡集』(《*Grundvig, S. 254*》)。其他, メーレン方言, イタリア語, スペイン語, ポルトガル語, 現代ギリシャ語に同様の民謡が存在するが, それは ㊵『ライファアーシャイト民謡集』(《*Reifferscheid*, S. 155》) 所収。

- 49) <Es hat e Buur es Döchterli,> 『エルク・ペーメ』第1巻280頁。出典 ①『ミューツ, スイス(キュールアイヘン)民謡集』(《*Mütz, Lieder zu der Sammlung von Schweizer-Flüchlein u. Volksliedern.—Melodie dazu von Huber*》)。②『ヘルダー民謡集』(《*Herder*, I, S. 139》)。③『角笛』I, S. 281。ゲーテ(Goethe)の言葉, „„ästhetischer Ausdruck des schweizerbäuerlichen Zustandes u. des höchsten Ereignisses dort zwischen zwei Liebenden.““ ④『トープラー民謡集』(《*Tobler*, II, S. 174》)。この民謡に対するヘルダー(Herder)の見解, 旋律(メロディー)に関して, „„Die Melodie ist leicht u. steigend wie eine Lerche; der Dialekt schwingt in lebendiger Wortverschmelzung ihr nach, wovon freilich in Lettern auf dem Papier wenig bleibt.““ なお, ベートーフェン(Beethoven)は, 古いメロディーについての「4/4 拍子, アンダンテ・コン・モート, スタッカート」というライヒアルト(Richardt)のメモに基づいて, 変奏曲『ピアノ又はハープのための6つの変奏曲』(《*Six variations faciles pour le Clavecin ou Harpe, sur un air*

Ältere Melodie.

(a) *Mäßig.* *Schweizerisch. 1781.*

Es hat e Buur es Tösch-ter - li, mit Na - me heiß es Ba - be - li; es
hat zwen Süp - si gelb wie Gold, drum ist ihm au der Durs - li hold.

Zweite Melodie.

Mäßig. *Schweizerisch. 1812.*

Es hat e Buur es Tösch-ter - li, mit Na - me heiß es Ba - be - li, es
hat zwen Süp - si gelb wie Gold, drum ist ihm au der Durs - li hold.

Suisse)) を作曲した。

- 50) <Es war eine schöne Zübin, ein wunderschönes Weib;> 『エルク・ペーメ』第1巻350頁。
(a)=出典 ①『角笛』I, 1806, S. 252. ②『クレッチマー・ツッカルマリオ民謡集』
(《Fr. u. Zuer., 2, 16》). ③『ホフマン民謡集』(《Hoffmann, Nr. 25》). (b)=④『エル
ラッハ民謡集』(《Erlach, 4, 69》). Aus Urach im Württemberg. ⑤『エルク』22°. Aus
Württemberg und Baden. ⑥『マイアー, シュパーベン民謡集』(《Meier, Schwab.
Volksl., 341》). ⑦『ホフマン, シュレジェン民謡集』(《Hoffmann, Schles. Volksl., Nr.
45》). ⑧『ミットラー民謡集』(《Mittler, 183》). (c)=旋律(メロディー)3曲は,
(1)=Aus Gnanzw in der Uckermark, 1841. (2)=Aus Schlefien. (3)=Aus Gildburghausen.
(b)=ボルフラムにより1880年~90年に蒐集。Aus dem Distrikt (Merkenbach, Sechshel-
den), Oberlahnkreis (Mittentirchen) u. Kreis Metzlar (Heringen). ⑨『エルク』22°. Aus der
Gegend von Frankfurt am M. und Bergstraße. ⑩『ボーテ, 春のアルム』(《Bothe,
Frühlingssalm, 1804, S. 65》). ⑪『角笛』I, 338 u. 4, 311. ⑫『クレッチマー民謡
集』(《Fr., I, Nr. 70 u. II, Nr. 16》). ⑬『エルク』I, 3, 9. ⑭『ジムロック民謡
集』(《Simrock, Nr. 256》). ⑮『デイトフルト民謡集』(《Ditf., II, S. 10》). ⑯『マ
イナート民謡集』(《Meinert, S. 135》). ⑰『キュンツェル民謡集』(《Künzel, 584》).

(a) *Mäßig bewegt.* *Mel. von der Gerd u. vom Oberrhein;*

Es war ei - ne schö - ne Zü - bin, ein wun - der - schö - nes Weib; sie
hatt' ei - ne schö - ne Tösch-ter, ihr Haar war ein - ge - floch - ten, zum Tanz war sie be - reit.

(b) *Sehr mäßig.* *Aus der Gegend v. Frankf., der Bergstraße u. dem Badenschen. 1840.*

Es war ein stol - ge Zü - bin, ein wunder - schö - nes Weib; die hatt' ei - ne schö - ne
Tösch - ter, ihr Haar war fein ge - floch - ten, zum Tanz war sie be - reit.

Erste Melodie.

Sehr mäßig.

Aus Granjow in der Uckermark. 1841.

(c) 

Es war ein - mal ei - ne Jü - din, ein wun - der - schö - nes Weib, die hatt' ei - ne
schö - ne Tochter, ihr Haar war glatt ge - flochten, zum Tanz war sie be - reit.

Zweite Melodie.

Sehr mäßig.

Aus Schlesien.



Es war ei - ne stol - ze Jü - din, ein wunder - schö - nes Weib, die hatt' ein schö - ne
Toch - ter, ihr Haar war fein ge - floch - ten, zum Tanz war sie be - reit.

Dritte Melodie.

Sehr gemessen.

Aus Hildburghausen. 1853.



Es war ei - ne stol - ze Jü - din, ein wun - der - schö - nes Weib, die
hatt' ei - ne schö - ne Tochter, ihre Haar war'n fein ge - floch - ten, zum Tanz war sie be - reit.

⑮『ミュンデル民謡集』(《Mündel, Nr. 17》)。⑯『ミットラー民謡集』(《Mittler, 208》)。⑰『ベッケル民謡集』(《Böcker, Nr. 64》)。⑱『シェーラー, ユングブルンネン』(《Scherer, Jungbr., S. 75》)。⑲『ミューラー民謡集』(《Müller, S. 74》)。⑳『エルラッハ民謡集』(《Erlach, 4, 69》)。㉑『ホフマン, シュレジエン民謡集』(《Hoffmann, Schles. Volksl., Nr. 25 u. 26》)。㉒『マイヤー民謡集』(《Meier, 341》)。㉓『ミットラー民謡集』(《Mittler, 209》)。㉔『エルク』2°。㉕『レヴァルター民謡集』(《Levalter, III, Nr. 9》)。㉖『アムステルダム歌集』(《Amsterd. Liedeboeck, 1582》)——〈Het was een Jodendochter angeführt als Tonangabe, 1562〉——。㉗『ヘルダー民謡集 (スコットランド方言から独訳)』(《Herder, I, 120》)。㉘『ヴェンツィヒ, 西スラブの童謡集』(《Wenzig, westslav. Märchenschatz, S. 210》)。㉙『キント, 珍らしい詩歌集』(《Kind, Neugirische Anthologie, S. 59》)。

- 51) 〈Es leuchten drei Sterne am Himmel〉『エルク・ペーメ民謡集』第1巻163頁。(a)＝出典 ①『ヤコービ, イーリス誌』(《Jacobi, Iris, 5 Bd., S. 134-135》)。(b)＝②『ヘルダー民謡集』(《Herder, I, S. 38》)——ゲーテ (Goethe) が 1771 年エルガスで蒐集。③『角笛』I, 327。④『ビュッシング及びハーゲンの民謡集』(《Büßching u. Hagen, B. L., S. 231》)。⑤『1818 年の民謡集』(《Gieder für Jung und Alt, 1818, S. 9》)。

[Ältere Form der Melodie.]

Ein wenig langsam und gezogen.

Jacobi, Iris, 1776, S. 136.

(a) 

Es leuchten drei Ster - ne am Him - mel, die ge - ben der Lieb ei - nen Schein, Gott
grüß euch, schö - nes Jung - frau - lein! Wo bind ich mein Riß - lein hin?

Jüngere und bessere Form der Melodie.

Zuerst in Niederf. Jung u. Alt. Berlin 1818. Nr. 8.

(b) 

Es se - hen drei Ster - ne am Him - mel, die ge - ben der Lieb ei - nen
Schein. Gott grüß euch, schö - nes Jung - frau - lein! ja, ja Jung -
frau - lein, wo find ich mein Rät - se - lein hin?

In Deutschland sehr verbreitet (Niederf. Nr. 11).

Sicher I. Nr. 5. 1824.

Mäßig geschwind.

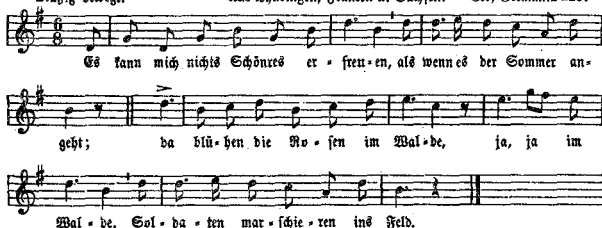
(b) 

Es kann mich nichts Schöneres er - freu - en, als wenn es der Som - mer an -
geht; da blü - hen die Ro - sen im Wal - de, ja, ja im
Wal - de, Sol - da - ten mar - schie - ren ins Feld.

Andere Lesart.

Mäßig bewegt.

Aus Thüringen, Franken u. Sachsen. — Erf., Germania 228.



Es kann mich nichts Schöneres er - freu - en, als wenn es der Sommer an -
geht; da blü - hen die Ro - sen im Wal - de, ja, ja im
Wal - de, Sol - da - ten mar - schie - ren ins Feld.

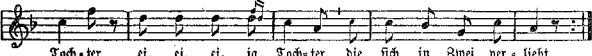
- ⑥『ズイルヒャー民謡集』(《Sicher, I, Nr. 5》)。⑦『エルク』⑧. 28。⑧『ジムロック民謡集』(《Simrock, 167》)。⑨『ミットラー民謡集』(《Mittler, 92》)。⑩『フイルマル民謡集』(《Wilmar, 156》)。⑪『シェラー, ユングブルンネン』(《Scherer, Jungbr., 31^a》)。ヘルダー (Herder) の旋律 (メロディー) に関する見解は、»Die Melodie hat das Helle und Feierliche eines Abendgesanges, wie unterm Licht der Sterne und der eiskälteren Dialekt schließt sich den Schwingungen derselben trefflich an, wie überhaupt in alten Volksliedern mit dem lebendigen Gesang viel verloren geht. Der Inhalt des Liedes ist kühn und schrecklich fortgehende Handlung: ein kleines lyrisches Gemälde, wie etwa Othello ein gewaltiges, großes Freskobild ist. Der Anfang des Liedes ist in mehreren Volksliedern eine Lieblingstrophie.« (c)=⑫『角笛』II, ③. 17 od. ③. 328. (d)=題名 „Falsche Liebe“. ⑬『エルク』Nr. 11. (e)=⑭『マイナート民謡集』(《Meinert, ③. 146》)。⑮『エルラッハ民謡集』(《Erlach, 4, 241》)。 (f)=口承による。Aus der Gegend von Wien u. Wiener-Neustadt um 1820. ⑯『ヴォルフ, 神学雑誌』(《Wolf, Ztschr. für Myth., I, 143》)。

- 52) <Ihr Herren, laßt euch singen ein wunder schönes Lied:> 『エルク・ペーメ』第1巻625頁。(a)＝出典 ①『エルク』Nr. 38^a。②『角笛』III, ③. 302。③ アルニム (Arnim) の蒐集をエルクが記載。(b)＝④『エルク』I, 5, Nr. 13. Aus Schlesien (Gaiman, Riegnitz, Hirschberg.) ⑤『ホフマン, シュレジエン民謡集』(《Hoffmann, Schleif. Volksl.》)。(c)＝⑥『エルク』Nr. 38^b。⑦『エルク』I, 2, 10。(d)＝題名 „Strafe der Falschheit“. クレーヴェマン (Klättemann) が1843年蒐集。Aus dem Sudjabingerlande (der Strich Landes an der Nordsee zwischen der Jade u. der Weser). (e)＝⑧『エルク』Nr. 38^c。⑨『モーネ, アンツアイガー誌, 第8年次』(《Mone, Anzeiger, 8 Jahrg.》)。(10)『ライフアーシャイト民謡集』(《Meißerscheit, Nr. 3》)。(f)＝⑪『エルラッハ民謡集』(《Erlach, 4, 165》) Aus Urach im Württembergischen. ⑫『ミュンデル民謡集』(《Mündel, Nr. 4》)。(g)＝題名 „Falscher Schwur“. ⑬『ベッカー, ライン民謡集』(《Becker, Rhein. Volksliederborn, Nr. 18》)。(h)＝題名 „Erinchens Brautlanstag“. ⑭『ミューレンホフ, シュレスヴィヒ・ホルシュタインの童話, 民話及び歌謡』(《Müllenhof, Märchen, Sagen u. Lieder aus Schleswig-Holstein, 1845, Einl., ③. 33》)。(15)『エルク』Nr. 38^d。なお、この民謡の由来に關す

Mäßig. Aus Schlesien.

(b) 

Was soll ich denn nun sin-gen? ein wonder-schönes Lied - von ei-ner Kaufmanns

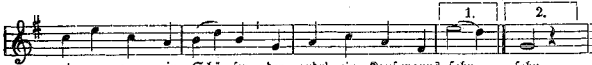


Toch-ter, ei, ei, ei, ja Toch-ter, die sich in Zwei ver-liebt.

Mäßig. Mel. aus Thüringen u. Frankfurter Gegend.

(c) 

Ein Mäd-chen von acht-zehn Jah-ren, die liebt zwei Bur-schen schon: der

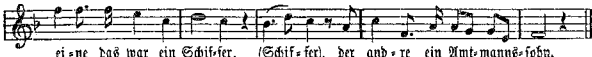


ei-ne war ein Schä-fer, der andr' ein Kauf-manns-sohn. sohn.

Etwas bewegt. Von der Nordsee (Sudjabinger-Land).

(d) 

Ein Mäd-chen von acht-zehn Jah-ren, das hat-te zwei Knaben so lieb, der

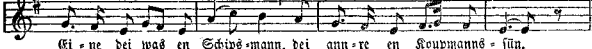


ei-ne das war ein Schif-fer, (Schif-fer), der and-re ein Amt-manns-sohn.

Sehr mäßig. Aus Westfalen (Paderborn).

(e) 

1. Ein Mäd-chen von ach-tein Jah-ren dat hab-be zwei Frig-gers to-galt, dei



ei-ne dei was en Schips-mann, dei am-re en Koup-manns-sohn.

Langsam und düster. Melodie zur Schlußstrophe.



るエルク・ペーメの見解として、»Die Ballade mag im 17 Jahrh. entstanden sein. In „Abraham à Santa Clara Heilighes Gemisch Gemasch“ 1704, S. 69 wird der ganze Inhalt des Liedes dargestellt; auf S. 63 steht sogar das Bild: Teufel mit der Tänzerin.—Vermuthlich sang man das Lied auch in den Niederlanden; denn in Staflpaert's Gulde Jaers Feestdaghen, S. 1181 (Antw. 1635) steht über einem geistl. Liede als Ton: »Gen müssen bed een bootman lief.—Die Sagen scheint in Niederdeutschland (dem alten Sachsen) sich gebildet zu haben und will man sie auf eine wirkliche Thatsache zurückführen.—Mich. Wiedemann, Historisch=poetischer Gesangenschriften 7 Monat Juli, darstellend Frischlinum den allzuberebten Medner, Spg. 1685, S. 71 erzählt: „In Sachsen hatte eine reiche Jungfrau sich mit einem armen aber schönen jungen Gesellen verlobt und geschworen, der Teuffel sollte sie holen, wo sie einen andern wolte. Weil sie aber einen andern erstrebet, kamen zweene Teuffel in Gestalt vornehmer Carallier, tanzten mit der Braut und führten sie im Tantzte hinweg mit jammerlichem Geschren; nach zween Tagen brachten sie die Kleider wieder.“ (Möhl., alleg., Tom. I, § 104, S. 107. Bergmann, bestrafte Zungen=Sünde, S. 101)«

- 53) [89 番] <Ich saß auf einem hohen Berg, sah nunter ins tiefe Thal,> 『エルク・ペーメ』第1巻313頁。(a)=題名, »Das Leid von Zungen Grafen«. 出典 ①『ヘルダー民謡集』(《Derder, I, S. 15》)。②『ライヒアルト, 音楽芸術誌』(《Reichardt, Musikal. Kunstmagazin, I, 1782, S. 144》)。③『エルク』S. 56。(b)=④『グレートー, プラグル誌』(《Gräter, Pragur.—Ein literarisches Magazin der deutschen u. nordischen Vorzeit., 1791, S. 264》)。⑤『エルク』S. 57。⑥『角笛』S. 57。(c)=題名, »Die Ranne«. ⑦『エルク』Nr. 18。⑧『ホフマン, シュレジエン民謡集』(《Hoffmann, Schlesif. Volksl., S. 30》)。⑨『シェーラー, ユングブルンネン』(《Scherer, Jungbr., 3》)。(b)=⑩『エルク』S. 59。⑪『ベッカー, ライン民謡集』(《Becker, Rhein. Niederborn,

(a) Langsam. Mündl. aus dem Elsaß. 1782.

Ich saß auf einem hohen Berg, sah nunter ins tie - fe Thal, da sah ich ein Schifflein
 schwe - ben, da sah ich ein Schifflein schwe - ben, da - rin drei Gra - fen saß'n.

Fragment aus dem 16. Jahrh.
 Schmelgel. 1544. Duodlik. Nr. 7.

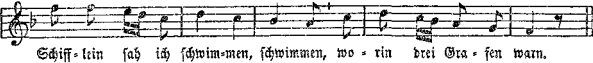
Ich stund auf ei - nem Ber - ge, ich sah inn tie - fe Thal.

(b) Langsam. Alte schwäbische Mel. 1791.

Stund ich auf ho - hen Ber - gen und sah wohl ü - ber den Rhein: ein
 Schiff - lein sah ich saß - ren, ein Schiff - lein sah ich saß - ren, der
 Mit - ter wa - ren drei, der Mit - ter wa - ren drei.

Mr. 7)). (c)=⑫『角笛』I, 257 u. III, 220. ⑬『ズイルヒャー民謡集』(《Silcher, II, Nr. 6》). ⑭『エルク』I, 1, 50. ⑮『クレッチマー民謡集』(《Kr., I, Nr. 64》). (f)=『ツールミューレン民謡集』(《Zurmühlen, Nr. 93》). 口承による。Aus Düfl. am

Mäßig langsam. Durch ganz Deutschl. verbreitet.

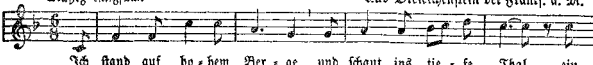
(c) 
 Ich stand auf ho - hem Ber - ge und schaut ins tie - fe Thal: ein

 Schiff - lein sah ich schwim - men, schwim - men, wo - rin drei Gra - fen warn.

Varianten. Norddeutsch.

Anfang bei Wyß 1818. 

Erste Melodie.

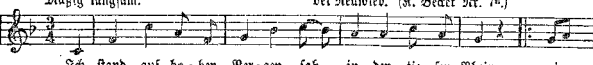
Mäßig langsam. Aus Dreieichenstein bei Frankfurt a. M.

(b) 
 Ich stand auf ho - hem Ber - ge und schaut ins tie - fe Thal, ein

 Schifflein sah ich schwim - men, schwim - men, da - rin drei Gra - fen warn.

Zweite Melodie.

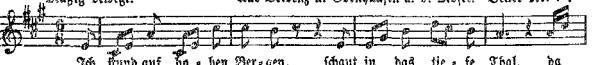
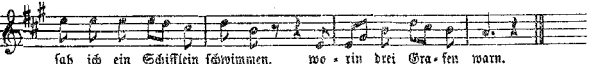
Mäßig langsam. Aus Daubhausen und Stöckhausen (Kr. Weglar) u. Gönnersdorf bei Neuwied. (K. Beder Nr. 74.)


 Ich stand auf ho - hen Ber - gen, sah in den tie - fen Rhein; ein

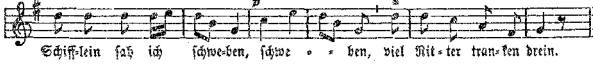
 Schiff - lein sah ich sah - ren, drei Rit - ter sa - hen drein.

Dritte Melodie.

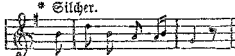
Mäßig bewegt. Aus Selbzig u. Gornhausen a. d. Mosel. Bader Nr. 74.


 Ich stand auf ho - hen Ber - gen, schaut in das tie - fe Thal, da

 sah ich ein Schifflein schwimmen, wo - rin drei Gra - fen warn.

Vielleicht langsam. Mel. 1818.

(c) 
 Stand ich auf ho - hem Ber - ge, sah in den tie - fen Rhein, ein

 Schifflein sah ich schwe - ben, schwe - ben, viel Rit - ter tran - ten drein.

* Silcher.



Niebrerrhein.

[90 番] <Se stont op hoghe berghen, ic sach ter see waert in,> 『エルク・ベーム』第1巻 321 頁。(a)=題名 „Die Nonne und der Reiter“. 歌詞 (テキスト) は次のとおり。

»Original« (Altndrl.)

»Ueobergung«

- | | |
|------------------------------|--------------------------------|
| 1. Ic stont op hoghe berghen | 1. Ich stand auf hohen Bergen |
| ic sach ter see waert in, | und sahe seewärts hin |
| ic sach een scheepken driven | ich sah ein Schifflein treiben |
| daer waren drie ruiters in | da war'n drei Reiter drin. |

2.)*
13.

2.)*
13.

*) 略。

①『アムステルダム歌謡集』(《Amsterd. Liedboek, 1591, Bl. 34》)。②『ヘールレム, 歌謡集』(《Haerlem, Liederb., 16》)。(b)=題名 „Die Nonne“。③『美しい鎮魂歌集』(《Blijden Requiem, 1631, Bl. 178》)。(c)=題名 „De dny Maegdefens (Nonne und Ritter)“。④『ヴィレムス民謡集』(《Willems, Nr. 56》)。(e)『スネルエールト民謡集』(《Snellart, Nr. 79》)。(f)『ウーラント民謡集』(《Uthland, 92 B》)。(g)『コーゼマーカー民謡集』(《Goussemaker, S. 204》)。(h)=題名 „De dny Maegdefens (Nonne und Ritter)“。⑧『コーゼマーカー民謡集』(《Goussemaker, S. 207》)。(i)『ヴィレムス民謡集』(《Willems, S. 147》)。(j)『ホフマン, オ

Niederl. Mel. 1631.

(b)
 Ze stont op ho - ghen ber - ghen, ic sach ter see waert in, ic sach een scheepken
 dri - ven, daer waeren drie rui - ters in, den ee - nen stont in mij - nen sin.

Mäßig bewegt.

Aus Flandern. Goussemaker S. 207.

(c)
 Wy klom - men op hoo - ge ber - gen en wy keken te zee - waert
 1. Wilt sit - gen auf ho - he Ber - ge und schau - ten da see - wärts
 in: wy za - gen een schip - ken va - ren, dry maeg - de - kens
 hin: wir sa - hen ein Schiff - lein sah - ren, drei Mäg - de - lein
 za - ten or in, en ee - ne was naer myn zin.
 sa - hen da - rin, die ei - ne wat nach mein'n Sinn.

Berggren, Folk-Sange 1860. S. 185. Udvalgte Danske Viser 1814. V. S. 84.

Andantino.

(b)
 Jeg gif mig op paa høie Bjerg, Gaad ned i dy - be Dal, Da
 faad jeg et Skib kom se - len - des, Hø - ri tre Øre - ver var.

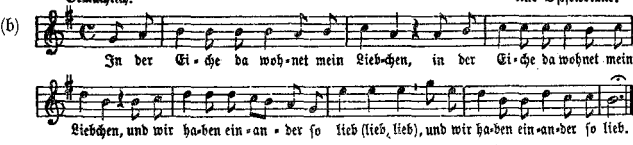
ランダ民謡集』《Hoffmann, Niederl. B. B., Nr. 20》。 (b) = デンマーク旋律 (メロディ) 2 曲。 (i) 《Folk-Sange 1860, S. 185》。 (ii) 《Udvalgte Danske Viser 1814, V, S. 84》。

- 54) <Im Argäu find zwen Liebi, Die hättid enandre gern.> 『エルク・ベーム』 第 1 巻 170 頁。
 (a) = 出典 ① 『スイス・クールアイヘン民謡集』 《Sammlung von Schweizer Reuthehen und Volksliedern, 3 Aufl., S. 65》。 ② 『ミュッツ, クールアイヘン民謡集』 《Mutz, Reuthehen, Nr. 24》。 ③ 『トープラー民謡集』 《Toblar, II, S. 180》。 ④ 『ズイルヒャー民謡集』 《Sicher, 7, 14》。 ⑤ 『エルク』 I, 3, 62。 ⑥ 『ジムロック民謡集』 《Simrock, 83》。 ⑦ 『マイアー民謡集』 《Meier, 291》。 (b) = 題名 „Feinslieb verloren“。口承による。 Aus Ostfriesland. (c) = 題名 „Die zwei Liebchen in Schwaben“。 ⑧ 『ベッカー民謡集』 《Becker, Nr. 14》。 (b) = 題名 „Die zwei Liebchen in Mailand“。 ⑨ 『ミューラー, ザクセン・エルツ山地の民謡』 《Müller, Volkslieder aus dem sächs. Erzgebirge, S. 44》。 ⑩ 『ツールミューレン民謡集』 《Zurnühlen, S. 25》。

Mäßig. Schweizer Reuthehen, Bern 1818, S. 65.

(a) 
 Im Argäu find zwen Lie-bi, im Argäu find zwen Lie-bi, die
 hât-tid en-an-dre gern (gern, gern), die hât-tid en-an-dre gern.

Gemächlich. Aus Ostfriesland.

(b) 
 In der El-che da woh-net mein Lieb-chen, in der El-che da wohnt mein
 Lieb-chen, und wir ha-ben ein-an-der so lieb (lieb, lieb), und wir ha-ben ein-an-der so lieb.

Nicht zu bewegt. Kirnweiler (Kr. St. Wendel). R. Becker Nr. 14.

(c) 
 Es wohnten zwei Liebchen in Schwaben, es wohnten zwei Liebchen in Schwaben, und die
 hat-ten ein-an-der so lieb, lieb, lieb, und die hat-ten ein-an-der so lieb.

Nicht schnell. Mel. aus Westfalen durch Dr. Grechius. 1874.

(d) 
 Es wa-ren zwei Verlieb-te in dem Mailand, es wa-ren zwei Verlieb-te in dem
 Mailand, die ha-bten ein-an-der so lieb, lieb, lieb, die ha-bten ein-an-der so lieb.

項 目	掲 載 の 民 謡 例	作 品 数
㊦.	「道化 (笑話) 及び密通のバラード」 (Schwauk- und Ehebruchsbalden)	(計5編)
	『燕麦の袋に入った貴族』(《Edelmann im Haberack》) ⁵⁵⁾	㊦・㊧ 146
	『不幸な夜道』(《Die unglückliche Nachtfahrt》) ⁵⁶⁾	㊦・㊧ 157
	『庭の書記』(《Der Schreiber im Garten》) ⁵⁷⁾	㊦・㊧ 143
	『乞食男と貴婦人』(《Bettelmann und Edelfrau》) ⁵⁸⁾	㊦・㊧ 139
	『漁師』(《Der Fischer》) ⁵⁹⁾	㊦・㊧ 151

- 55) <Es wohnt ein Müller an jenem Teich,> 『エルク・ペーメ』第1巻479頁。出典 ①『エルク』I, 2, 16 u. 51; I, 5, 27 u. 28. Aus dem Brandenburg. ②『ヴェッケルリオン民謡集』(《Wackerlin, II, ㊦. 300》)。③『シェーラー、ユングブルンネン』(《Scherer, Jungbr., Nr. 155》)。④『デイトフルト民謡集』(《Ditt., II, ㊦. 53》)。⑤『ジムロック民謡集』(《Simrock, 434》)。⑥『ミットラー民謡集』(《Mittler, 325-327》)。⑦『シャーデ民謡集』(《Schade, Nr. 7》)。⑧『クレッチマー民謡集』(《Kr., I, 136 u. II, 75》)。⑨『ボガツチニヒ民謡集』(《Bogatschnigg, II, 609》)。⑩『シュロッサー民謡集』(《Schlosser, 307》)。⑪『ミュンデル民謡集』(《Mündel, Nr. 7》)。

Mäßig geschwind. Aus dem Brandenburgischen 1836.
Eingelne. Alle. Eingelne.

Es wohnt ein Mül-ler an je-nem Teich, -lauf, Mül-ler lauf! — der
Chor.
hatt ei-ne Toch-ter und die war reich, Lauf, Mül-ler lauf, wie die
Ra-ge nach der Maus! pos Hüß-ner-wet-ter, Mül-ler, Mül-ler, lauf lauf lauf mein
lie-ber Mül-ler lauf, mein lie-ber Mül-ler lauf.

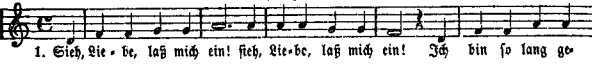
Andere Lesart.
Munter. Wackerlin II, ㊦. 300.

Es wohnt ein Mül-ler in je-nem Thal, [Lauf Mül-ler lauf!] nicht
weit da-von ein E-del-mann. [Lauf, Mül-ler lauf, wie die Raß auf die
Maus; pos Him-mel an der Wand, Mül-ler lauf, lauf, lauf! mein lie-ber Mül-ler
lauf, mein lie-ber Mül-ler lauf!]

- 56) <Es sah ein Gul und span:|:>『エルク・ペーメ』第1巻500頁。(a)＝出典 ①『角笛』4, 47。②『ウーラント民謡集』(《Uhlant, Nr. 260 B》)。(b)＝③『1690年頃の青年歌集』(《Tugendhafter Jungfrauen und Jungengefellen Zeit-Vertreiber durch Hilarius Lustig von Freuden Thal um 1690, Nr. 194》)。(c)＝④『ハインホーフアー、歌集』(《Hainhofer's, Lutenbuch, II, Bl. 7》)。(d)＝⑤『ウーラント民謡集』(《Uhlant, 260 C》)。(e)＝Aus Rönnebeck bei Gransee. (f)＝題名 „Die unheilvolle Nachtfahrt“. 口承による。Aus dem Oberlahn, Dillkreise, 1880. また ⑥『ベッカー、ライン民謡集』(《Becker, Rhein. Volksliederb., Nr. 62》)。(g)『ジムロック民謡集』(《Simrock, Nr. 48》)。(h)『マイナート民謡集』(《Meinert, S. 131 u. Nr. 59》)。(i)『角笛』II, 204。(j)『クレッチマー・ツツカルマリオ民謡集』(《Kr. u. Zucc., 121》)。(k)『エルク』I, 5, 34 u. II, 2, 43-45。(l)『ヴァルター民謡集』(《Walter, 223》)。(m)『マイアー民謡集』(《Meier, Nr. 218》)。(n)『ジムロック民謡集』(《Simrock, 48》)。(o)『ミットラー民謡集』(《Mittler, 293-299》)。

Alte Melodie.

Schmigel 1544, Quodl. 8. Dort eine Lenz höher (Dur).

(a) 

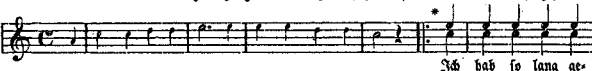
1. Sieh, Sie - be, laß mich ein! sieh, Sie - be, laß mich ein! Ich bin so lang ge -



stan - den, ich möcht er - fro - ren - sein.

Zweite Lesart.

Aus zwei Fragmenten bei Brand, Fasc. quodlib. 1611 Nr. 2 hergestellt.



Ich hab so lang ge -



stan - den, er - fro - ren möcht ich ——— sein.

* Nur diese zweite Hälfte ist bei Brand überliefert, die erste ergänzt nach Schmigel.

Alte Melodie.

Hainhofer, Lautenb. 1604.

(c) 

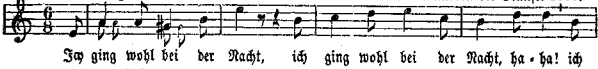
Ich ging bei eit - ler Nacht —, ich ging bei eit - ler Nacht



—, die Nacht die war so fin - ster, daß ich kein Glimm mehr sah! —

Etwas bewegt

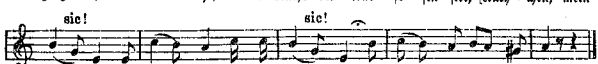
Aus Rönnebeck bei Gransee 1855.

(b) 

Ich ging wohl bei der Nacht, ich ging wohl bei der Nacht, ha - ha! ich



ging wohl bei der Nacht, die Nacht die war so fin - ster, (Kätz - chen, mein



sie! sie! Wab - chen, Ra - tie - chen, Do - ro - the - chen, daß man kein Stern mehr sah.

Forster V. 1556, Nr. 8.

(a) 

So wollt' ich a - ber he - ben an von ei - nem rei - chen
far - gen Mann; er hatt ein Fräulein hübsch und fein, vor dem beschloß er
Brot und Wein, das hei - a - ho!

Aus dem Ruhlandschen.

(b) 

Es gieng a mol a Bet - tel - mann her - aus, ar gieng wol für der schönen Frauen
haus, ar bat sie um an Almosen an, daß er sich hübsch fein er - näh - ren kann.

Mäßig geschwind. Aus der Uckermark 1840.

(c) 

Ein Bet - tel - mann kam aus Hun - ger - land her, hei - ß - a! sein Bet - tel - sad war ihm
viel zu schwer. hei - bi hei - bi, hei hei ha! Hal - le - ri dom, bei dom da!

ラント民謡集』《Uhlant, Nr. 285》。③『エルラッハ民謡集』《Erlach, 2, 158》。④『シャーデ, ワイマール年報』《Schade, Weimar. Jahrb., 3, 465》。(b)=⑤『クレッチマー・ツッカルマリオ民謡集』《Nr. u. Zucc., I, Nr. 167》。(c)=⑥『エルク』II, 2, Nr. 19. Aus der Uckermark. (b)=ブレンニース (B. v. Brönnes) が蒐集。Aus dem Odemwald.

- 59) <It wolbe ein gut Fische, It visscen up einen Dik,>『エルク・ベーム』第1巻488頁。
(a)=出典 ①『低地ドイツ民謡集』《Niederb. Niederb., Nr. 78—Anfang des 17 Jahrh.》。
②『ウーラント民謡集』《Uhlant, Nr. 283 u. 284》。③『ホフマン, オランダ民謡集』《Hoffmann, Niederländ. Lied., Nr. 52》。④『アントワープ民謡集』《Antwerpen Lied., Nr. 70》。(b)=題名 „Die Frau Fischein“. ⑤『ヴァッケルナーゲル, 教会歌集』《Wackernagel, Kirchenlied, S. 838》。

1. Aus 3 Fragmenten v. Jahr 1544, hergestellt v. B.

1. 

Ich weiß ein hübsche Frau, die fuhr wol
Mit ih - rem klei - nen Schif - fe - lein, nach ei - nem

2. 

u - ber See. Und sie fuhr hin und wie - der her, sie fuhr wol
was ihr meh! Was führt das sel - big Fräulein sein in ih - rem

3. 

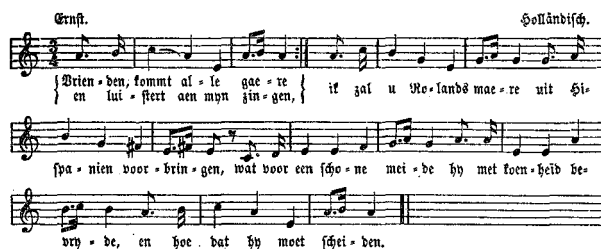
an das wil - de Meer, die Nacht bis an den Tag,
klei - nen Schif - fe - lein? Gut Fisch - ge - schir - re,



das Fräulein fuhr ir - re!

項 目	掲 載 の 民 謡 例	作 品 数
D.	「殺人と犯罪」(Taten und Verbrechen)	(計 19 編)
a.	「騎士と強盗」(Ritter und Räubertaten) 『ローラントとゴードリンド』(《Roland und Godelinde》) ⁶⁰⁾ 『ヴィルヘルムテル』(《Wilhelm Tell》) ⁶¹⁾	(2 編) ㊤・㊦ 91 ㊤・㊦ 32
b.	「家畜泥棒」(Viehdiebstahl)	(4 編)
c.	「殺人、子供殺し」(Mordtaten, einschließlic Kindsmord) 『女主人の娘』(《Die Wirtin Töchterlein》) ⁶²⁾ 『子供を殺した女』(《Die Kindsmörderin》) ⁶³⁾	(8 編) ㊤・㊦ 57 ㊤・㊦ 56
d.	「判決からの逃亡」(Der Verurteilung entgangen) 『部屋の仲間』(《Der Zimmergeselle》) ⁶⁴⁾	(5 編) ㊤・㊦ 129

60) <Kommt Freude all' zusammen> 『エルク・ペーメ』第1巻324頁。出典 ①『アールノルト民謡集』(《Arnold, Volkslieder, 5 Heft, S. 18》)。エルク・ペーメは、»Das Lied war durch Nommen des Klosters Gent bis Ende des 18 Jahrh. erhalten und ist dort, wo nach der Sage*) Godelinde ihr Leben beschloß, mit Vorliebe gesungen worden. Wenn es nicht sehr alten Ursprungs und der Sprache nach mit deutschen Wortformen untermengt ist, nun so bleibt es doch eine jüngere und werthvolle Ballade.«と述べている。



*) Str. 18 (Ende Str.): Gollindo ganz verlassen
In der Stadt Gent kommt an:
„Keinen Trost kann man mir bieten,
Darum will ich nun gehn
Hin in ein Kloster Meine,
Will da als Jungfrau reine
Meinem Roland treu verbleiben!“

61) <Wilhelm hin ich der Telle, Von Geldes Muth und Blut,> 『エルク・ペーメ』第1巻101頁。この民謡の原作者は、ヒロニムス・ムーハイム (Hirrommus Muheimb) である。し



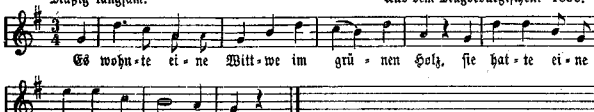
カシムーハイム (Wilhelm) がこれを作詩するに際しては、(a) 『ナッサウのヴィルヘルム』 (《Wilhelm von Nassauen》) が模範となっている。以後類似のものは、(b) 《Ein schön neues Liedt von dem kistter Eidgenossischer Freiheit Wilhelm Tellen, im dem thon, wie Wilhelm von Nassau. gdrckt. Freyburg im Uhtland 1613》。 (c) 《Ein new Lied von Wilhelm Thell, von der Historie und dem Ursprung der Ghdgnosenschaft, durch Heir. Rutheims gebeßert und gemehrt. Im Thone, Wilhelmus von Nassawe. 1633》。これに続いて、(d) 1660。 (e) 1673。 (f) 1674 と出版され、(g) 《Ein schönes Spiel, Gehalten zu Bri in der Ghdgnoschaft, Von Wilhelm Tellen 1698》に至ってほぼ詩形が定着した。なお、エルク・ペーメはこの歌の由来について、»Noch giebt es ein älteres Tellen-Lied, das zuerst um 1545 gedruckt erschien. Es ist einem histov. Liede vorangesetzt, daß von dem Bunde der Schweizer gegen den Herzog Karl von Burgung handelt, der im Kriege 1477 erschlagen wurde. H. Bl.:*) „Ein hüpfch Lied vom Ursprung der Ghdgnoschaft und dem ersten Ghdgenossen Wilhelm Thell genannt, auch von dem bundt mitkämpft einer Ghdgnoschaft wider Herzog Karle von Burgund, und wie er erschlagen ist worden.“ & 述べ、(h)*) 《Ein hüpfch Lied ist woden. gdrckt. zu Zürich by Augustin Frieß, um 1545》, (i) 《Text von 35 Strophen bei Röner, histl. VI, 1840, Nr. 1, Aus Basel und Bern》, (j) 《Nochholz, Eidgenossische Lieder, 1835, S. 206—v. Zikencron, histl. VI, Nr. 147》, (k) 『トープラー民謡集』 (《Tobler, I, S. 3》) 等を挙げている。

- 62) <Es ritten drei Reiter wohl über den Rhein> 『エルク・ペーメ』第1巻188頁。(a)＝出典 ①『ホフマン民謡集』(《Hoffmann, Nr. 29》)。②『ジムロック民謡集』(《Simrock, 32 u. 33》)。③『角笛』II, 199。④『シェーラー、ユングブルンネン』(《Scherer,



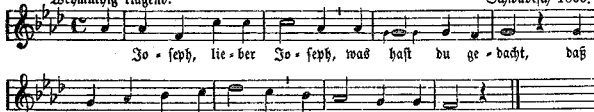
Zungbr., 41)). (b)=⑥『アレマニア』《Mermania, Jahrb. f. Sprache u. Geschichte des Oberrheins, 1877, S. 288》。口承による。Aus dem Hessian-Darmstädtischen (Gegend zwischen Main, Rhein und Neckar). (c)=⑥『ツールミュレン民謡集』《Zürmühlen, Nr. 21》。⑦『クレッチマー・ツッカルマリオ民謡集』《Kr. u. Zucc., I, Nr. 41》。⑧『シェーラー, ユングブルンネン』《Scherer, Zungbr., Nr. 41》。 (d)=⑨『ジムロック民謡集』《Simrock, Nr. 33》。⑩『アーノルトの手稿』《Arnold's Handschrift um 1860》。⑪『クレッチマー・ツッカルマリオ民謡集』《Kr. u. Zucc., II, Nr. 41》。 (e)=⑫『パリジウス民謡集』《Parisius, Nr. 18》。⑬『ホフマン民謡集』《Hoffmann, Nr. 29》。⑭『ヴァイマーラー年報』《Weim. Jahrb., III, 276》。⑮『ペーター民謡集』《Peter, S. 207》。

Mäßig langsam. Aus dem Magdeburgischen. 1856.

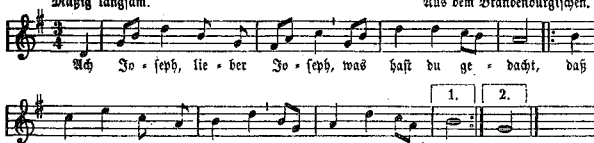
(e) 
Es woh-n-te ei-ne Witt-we im grü-nen Holz, sie hat-te ei-ne
Koch-ter und die war stolz.

- 63) <Joseph, lieber Joseph, was hast du gedacht> 『エルク・ベーム』第1巻185頁。(a)=出典 ①『ライヒアルト, ベルリン音楽誌』《Reichardt, Berlinische musikalische Zeitung, II, Jahrg., Berlin 1806, S. 40》。②『エルラッハ民謡集』《Erlach, 3, 464》。③『エルク』II, 2, 30。④『クレッチマー・ツッカルマリオ民謡集』《Kr. u. Zucc., I, S. 84》。⑤『ヴォルフ家庭歌謡撰』《Wolff, Hauschach, 186》。⑥『ミットラー民謡集』《Mittler, 63》。⑦『ジムロック民謡集』《Simrock, 61》。⑧『フィルマール民謡集』《Wilmar, 143》。⑨『エルク』II, 6, 48。⑩『ベッケル民謡集』《Böckel, Nr. 34》。⑪『ミューラー民謡集』《Müller, 77》。⑫『シェーラー, ユングブルンネン』

Mehrmäßig klagenb. Schwäbisch 1806.

(a) 
Jo-seph, lie-ber Jo-seph, was hast du ge-dacht, daß
du die schö-ne Ran-nerl ins Un-glück ge-bracht!

Mäßig langsam. Aus dem Brandenburgischen.

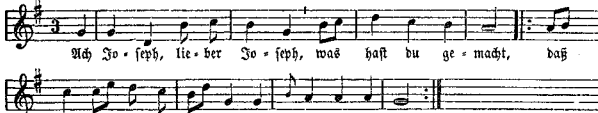
(b) 
Ach Jo-seph, lie-ber Jo-seph, was hast du ge-dacht, daß
du die schö-ne Per-sa ins Un-glück ge-bracht.

Etwas langsam. Aus der Gegend von Eitenfeld in Oesterreich. 1842.

(c) 
Mein lie-be Frau Mut-ter, mit mir ist schon aus: jetzt werdens mich bald
füß-ren beim Schandstör hin-aus.

Erste Melodie.

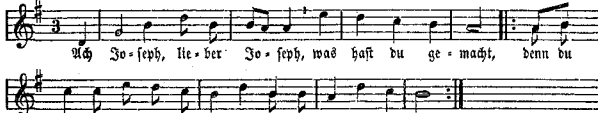
Rangsam. Aus Eibach bei Dillenburg. 1872.

(b) 

Ach Jo-seph, lie-ber Jo-seph, was hast du ge-macht, daß
du die schö-ne Ber-tha ins Un-glück ge-bracht.

Andere Melodie.

Rangsam. Aus Niederreifenberg (Unterlaunusfr.) u. Ringelbach, Kr. Siegenhain. 1880.



Ach Jo-seph, lie-ber Jo-seph, was hast du ge-macht, denn du
hast ja die schö-ne Ber-tha ins Un-glück ge-bracht.

《Scherer, Jungb., Nr. 38》。 (b)=⑬『エルク』II, 3, 51。 ⑭『ミットラー民謡集』
《Wittler, Nr. 65》。 (c)=『エルク』II, 66, Nr. 48。 (d)=⑮『ミューラー民謡集』
《Müller, S. 97》。 (e)=口承による。 Aus dem Kreis Limburg und Unterlahnkreis.

- 64) <War einst ein jung jung Zimmergefell, >『エルク・ペーメ』第1巻446頁。 この民謡に
関する由来について、エルク・ペーメは、 »Weit verbreitet und seit 4 Jahrhunderten
gefangen ist die Romantze von einem Handwerksgefallen, der heimlich mit einer Frau höheren
Standes der Minne pflog, weil von weibl. Seite dazu verführt. Er wird zum Tode verur-
teilt, aber endlich von Schuld freigesprochen, sogar ein Zimmergefell (und das zumeist), bald
ein Schlosser=, Schmiede=, Tischler=, Schneider=, Schuhmachergefell, in Tyrol sogar ein
schwarzbrauner Engelschmiedesgefell, der in der Handlung auftritt; ursprünglich war es wohl
ein hübscher Schreiber.« と述べている。 (a)=出典 ①『ワインク, 家庭歌曲撰集』
《Hint, Hansschuß, Nr. 98》。 ②『ジムロック民謡集』《Simrock, Nr. 46》。 ③『シェ
ーラー, ユングブルンネン』《Scherer, Jungbr., Nr. 28》。 (b)=④『アントワーブ

Seiter. Mel. seit 1820 in ganz Deutschland gefannt.

(a) 

War einst ein jung jung Zim-mer-ge-fell, der baut dem Markgräfin ein Haus von
lau-ter Sil-ber und E-del-ge-stein, sechs-hun-dert Schau-lä-den hin-aus, von
lau-ter Sil-ber und E-del-ge-stein, sechs-hun-dert Schau-lä-den hin-aus.

Dit is die wise van den timmerman. Mel. im Antwerpner geist. Edb. 1539. Nr. 40.

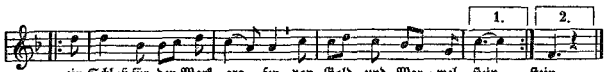
(b) 

— Wie wil ho-ren fin-ghen van ee-nen Zim-mer-man, van
ee-ner borch-gra-vin-nen, hoe sie haer lief ghe-wan.

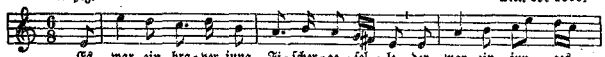
Welt. Text 13 Str. Antw. Edb 1544. Nr. 164. Daraus bei Hoffm. Nr. 35.

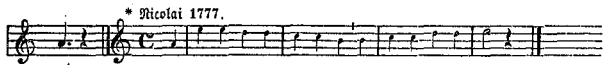
項目	掲載の民謡例	作品数
㉔.	「自然界の魔法, 神秘のパラデー及び伝説のパラデー」 (Naturmagische, mythische und Legendenballaden)	(計 64 編)
a.	「死者との出遭い」(Begegnung mit Toten)	(2 編)
b.	「超自然物との出遭い」(Begegnung mit übernatürlichen Wesen) 『佝僂の小人』(《Das bucklige Männlein》) ⁶⁵⁾ 『悪魔にとりかえられた醜い子』(《Der Wechselbalg》) ⁶⁶⁾	(7 編) ㉔・㉕ 4 ㉔・㉕ 12
c.	「変化」(Verwandlungen) 『変化した花』(《Die verwandelte Blume》) ⁶⁷⁾ 『死者の花』(《Die Arnsjünderblume》) ⁶⁸⁾	(9 編) ㉔・㉕ 9 ㉔・㉕ 10
d.	「魔法と予徴」(Magie und Vorzeichen) 『ファウスト博士』(《Doktor Faust》) ⁶⁹⁾	(8 編) ㉔・㉕ 220
e.	「罰せられた犯罪行為」(Die bestrafte Verflündigungen) 『冷酷な姉』(《Die unbarmherzige Schwester》) ⁷⁰⁾ 『冷酷なユンカー』(《Die unbarmherzige Junker》) ⁷¹⁾ 『天国のとびらの前の 3 人の姉妹』(《Drei Schwestern vor der Himmelstür》) ⁷²⁾	(32 編) ㉔・㉕ 209 ㉔・㉕ 210 ㉔・㉕ 218
f.	「天国と地獄」(Himmel und Hölle)	(6 編)

Langsam. Mel. aus dem Taunus (Würges) 1880.

(c) 
 Vor einst ein jung, jung Him-er-ge-sell, der hat-te zu bau-en ein Schloß,

 ein Schloß für den Mart-gra-fen von Gold und Mar-mel-fein. fein.

Mäßig. Mel. vor 1800.

(d) 
 Es war ein tra-ber jung Fi-scher-ge-sel-le, der war ein jun-geß

 Blut, der fisch-te des jun-gen Mart-gra-fen See, die Fi-sche die fan-get er

 * Nicolai 1777.
 gut.

宗教歌集』(《Antwerpner geistl. Ldb., 1539, Nr. 40》)。⑤『ホフマン民謡集』(《Hofmann, Nr. 35》)。(c)=⑥『ブレーレ民謡集』(《Bröhe, Nr. 7》)。(d)=口承による。Aus Hohen-Saathen bei Dierberg.

65) <Will ich in mein Gärtchen gehn,> 『エルク・ベーム』第1巻20頁。(a)=出典 ①『角

(a) **Seiter.** **Volksweise seit 1810.**

Will ich in mein Gär-ten gehn, will mein Zwi-e-beln gie-ßen,
steht ein buch-li-g Mann-lein da, fängt gleich an zu nie-ßen.

Zur Schlußstrophe.

Langsamer.

Sie-bes Kind-lein, ach ich bitt: bet für's buch-li-g Mann-lein mit!

(b) **Munter.** **Ulfab: Weckerlin II, 328.**

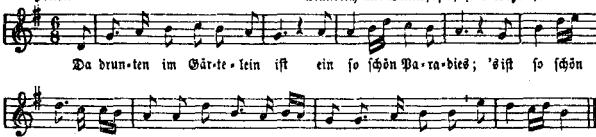
1. Wie-te Mor-gen, buch-li-ge Gret, wie stehts um un-sre Sa-he? Un-
wenn ich an di' Du-del dent, so muß i all-weil la-ge.

- 笛』III, Anh. 54. ②『同』Nr. 17. (b)=③『シュテナーバー民謡集』(《Stöber, Nr. 187 u. 188》). ④『トープラー民謡集』(《Tobler, II, S. 190》). (c)=⑤『ミットラー民謡集』(《Mittler, Nr. 1137》). (b)=⑥『ヴェッケルローン民謡集』(《Weckerlin, II, 328》). (e)=⑦『ツールミュレン民謡集』(《Zurmühlen, Nr. 5》)).
- 66) <Es krähen die Hähnlein all:>『エルク・ペーメ』第1巻34頁。出典 ①『マイナート民謡集』(《Meinert, 179》). ②『ミットラー民謡集』(《Mittler, 554》). エルク・ペーメのこの民謡集に関する見解、>Es (—筆者、この歌のこと) ist wohl in Deutschland das einzige, das vom Wechselbalg handelt. Obwohl auch die Irländer und Bergschotten reich an profaischen Geschichten und Wechselbälgen sind, giebt's doch in Irland und Schottland davon. Von Jehen war es ein Lieblings-geschäft der Elfen, Kinder umzutauschen, um durch Vermischung mit dem erlösten Geschlechte einen Theil vom ewigen Heil zu gewinnen. Daher auch die Wöchnerinnen mit so großer Sorgfalt bewacht und viezehn Tage—so lange dauerte die Macht des Bösen über sie—nicht mit ihrem neugeborenen Kinde allein gelassen werden. Ein solches von Nigen und Elfen vertauschtes häßliches Kind, Wechselbalg genannt, macht der Mutter ungeheure Noth, zehrt unerfättlich an ihr und ist nur mit argen Schlägen zu behandeln.«
- 67) <Da drunten im Garten da ist ein schönes Paradies;>『エルク・ペーメ』第1巻27頁。(a)=出典 ①『エルク』Nr. 100. Aus der Gegend von Gießen (Reißkirchen und Manlfach) 1842. なお、Heffen-Darmstadt 1844. ②『ミットラー民謡集』(《Mittler, Nr. 229》). ③『角笛』II, 13. (b)=ベッカー (Becker) が蒐集。Aus Meßlar.

(a) **Mäßig und innig.** **Melodie aus der Gegend von Gießen. 1842.**

Da drunten im Gar-ten da ist ein schö-nes Pa-ra-dies; das ist so schön
an-zu-sehn, daß man möcht drin-ne gehn, daß man möcht drin-ne, ja drin-ne gehn.

Steiter. Mündlich aus Dutenhofen, (Kr. Wehlar). 1892.

(b) 

Da brun-ten im Gär-te • lein ist ein so schön Pa-ra-dies; 's ist so schön
an-zu-sehn, daß man drein möch-te gehn, daß man drein möch-te, ja möch-te gehn.

Erste Melodie.

Steiter. Mel. von Bergleuten in Bantorf (unfern Hannover) 1879 gehört.

(c) 

Dort brunten im Gar-ten da ist ein schönes Pa-ra-dies, das war so schön anzu-
sehn, daß man mocht drin-nen gehn, daß man mocht drinn, ja drin-nen gehn.

Zweite Melodie.

Mäßig bewegt. Aus Oberhessen. 1885.



Da un-ten im Gar-ten da ist ein so schön Pa-ra-dies. Es ist so schön zu
sehn, daß man hinein möcht gehn, daß man hin-ein möcht gehn, hinein möcht gehn.

- 68) <Es freit sich Ritter Nereich> 『エルク・ベーム』第1巻30頁。(a)＝出典 ①『マイナート民謡集』(『Weinert, Nr. 5』)。エルク・ベームの解説, »Die Arme=Sünderblume: Begwart, *Cichorium Intybus*, wächst auf Rainen und an Wegen. Die ruhrende Verwandlungsgeschichte dieser Pflanze und ihr landschaftlicher Name gründen sich auf die alte Gewohnheit: Selbstmörder (eine Art armer Sünder) auf Scheidewegen an der Dorfgrenze zu begraben. Auf die Eigenschaften des wilden Begwarts, seine meist blauen Blüten mit aufgehender Sonne zu öffnen und mit untergehender zu schließen deutet (Str. 13*)—H. Heine's „Arme Sünderblume“ (Buch der Lieder, S. 160) hat mit diesem Volksliede nichts gemein.«

*) Str. 13: Vormittags will ich schön aufblühen,

Nachmittags aber traurig stehn;

(b)＝題名 „Die verwandelte Königswittne“. ②『マग्デブルグのペンフレット』(『Magdeburg, 1584, Bl. 5』)。エルク・ベームは『同ペンフレット』から引用している。即ち »Item, drey Frauen wurden verwandelt in Blumen, so auf dem Felde stehn, doch deren eine mocht des Nachts in irem Haus sein, sprach auff ein zeit zu ihrem Manne, als sich der Tag naht, vnd sie widerumb zu iren Gespielen auff das Feld kommen, vnd ein Blum werden muß: so du heut vor mittag kompt, und mich abbrichst, werde ich erlößt, vnd fürden bey dir bleiben, als dann geseach.—Nun ist frag, wie sie ir Mann gekent hat, so die Blumen ganß gleich, vnd ohn unterscheid waren.«

- 69) <Hört ihr Christen mit Verlangen, etwas Neues ohne Graus:> 『エルク・ベーム』第1巻655頁。出典 ①『デイトフルト民謡・社交歌集』(『Dittfurth, Volks- und Gesellschaftslieder, 1874, Nr. 25』)。②『角笛』I, 194。③『シュロツサール, シュタイアーマル

bearbeitet in Koler's Hausgejängen, welche älteste Lesart*).....»

*) ①~⑩などは、非常に古い言葉の民謡を示している。

- 71) <Es war einmal ein große Stadt,>『エルク・ペーメ』第1巻625頁。出典 ①『エルク』Nr. 42。②『ミットラー民謡集』(《Mittler, 391》)。



- 72) <Es flohen drei Sterne wohl über den Rhein,>『エルク・ペーメ』第1巻645頁。(a)=出典 ①『角笛』II, ②, S. 210。②『ジムロック民謡集』(《Simrock, Nr. 68》)。③『デイトフルト, 110 曲集』(《Dittfurth, 110 Lieder, Nr. 26》)。(b)=④『エルラッハ民謡集』(《Erlach, III, 65》)。(⑤『角笛』II, 213。⑥『シェーラー, ユングブルンネン』(《Scherer, Jungbr., Nr. 46》)。(c)=⑦『ミューレンホフ, シュレスビヒ・ホルシュタインの民謡, 童話及び歌謡集』(《Müllenhoff, Sagen, Märchen und Lieder aus Schleswig-Holstein, S. 496》)。(b)=⑧『エルク』III, 11, Nr. 77。(c)=⑨『トープラー民謡集』(《Tobler, I, S. 94》)。(f)=⑩『コーゼマーカー民謡集』(《Couffemaker, Nr. 49》)。



Erste Melodie.



Zweite Melodie.



項 目	掲 載 の 民 謡 例	作 品 数
8.	「動物と植物」(Tiere und Pflanzen)	(計17編)
a.	「動物」(Tiere)	(15編)
	『鳥の結婚』(《Vogelhochzeit》) ⁷³⁾	㊤・㊦ 163
	『兎のなげき』(《Häntelagen》) ⁷⁴⁾	㊤・㊦ 167-70
	『熊と農夫』(《Der Bär und die Bauern》) ⁷⁵⁾	㊤・㊦ 161
b.	「植物」(Pflanzen)	(2編)
	『樅の木』(《Der Tannenbaum》) ⁷⁶⁾	㊤・㊦ 175

- 73) <Es wollt gut Reiger fischen,> 『エルク・ペーメ』第1巻510頁。(a)=出典 ①『ハイ
ンホーファー、歌集』(《Hainhofer, Lantenb., II, Bl. 131》)。②『角笛』4, 200。③
『ウーラント民謡集』(《Umland, 10 M, 11 B》)。④『ホフマン、シュレジエン民謡集』
(《Hoffmann, Schles. B. L., S. 73》)。(b)=⑤『ウーラント民謡集』(《Umland, 10 M》)。
⑥『ヘルダー民謡集』(《Herder, I, 1778》)。(c)=⑦『ホフマン、シュレジエン民謡
集』(《Hoffmann, Schles. B. L., Nr. 43》)。(f)=⑧『エルクの遺稿』(《Erf's Nachlaß》)。
この歌は昔は、結婚式に歌われた——エルク・ペーメ > Das Lied wurde früher bei

(a) 

Seinhofer's Lantenb. 1693.
Es wollt gut Rei-ger fi-schen auf ei-ner brei-ten Sei-de, da
kam der Storch, da kam der Storch und stahl ihm sei-ne Wei-de

Fragm. im Quodlib. v. J. Möller. Frankfurt a. M. 1610.
Der U-hu, der U-hu schlug uf der Lautn und sang dar-zu.

Erste Melodie.
Munter. Aus der Gegend von Buzlau u. Hainau.
(c) 

1. Es wollt ein Vo-gel Hoch-zeit ma-chen in dem grü-nen Wal-de. Di-di-
ral-la-la, bi-bi-ral-la-la, bi-bi-ral-la ral-la la!

Zweite Melodie.
Munter. Von einem Danziger Bürger 1642 gehört.


Es wollt ein Vo-gel Hoch-zeit ma-chen in dem grü-nen Wal-de,
hop-sa-sa, bra-la-la, in dem grü-nen Wal-de.

(b) *Mäßig.* Aus Charlottenburg 1843.
 Es wollt ein Bög-lein Hoch-zeit-machn, wol in dem grü-nen Wal-de, fi-de-
 ral-la-la, fi-de-ral-la-la, fi-de-ral-la-la fi-dom.

(c) *Seiter.* Aus Neuhof bei Danzig 1845.
 Der Sper-ling, der Sper-ling, der gibt der Braut den Trau-ring. Der Hur-hahn, der
 Hur-hahn, der ist der Äu-ßer und Kap-lan. Die En-te, die En-te, die
 war der Sup-rin-den-te. Der schwar-ze Ha-be war der Koch, das
 steht man an den Fe-bern noch.

(f) *Munter. Chor.* Aus Berlin 1853.
 Es woll-ten die Bög-ge-len Hoch-zeit-machn wol in dem grü-nen Wal-de,
 wo-zu wol auch ge-la-ben wann die Bög-lein jung und al-te.
Solo.
 Der Sper-ber, der Sper-ber, der war der Hoch-zeit-s-ber.
Chor.
 Di-bi-ral-la-la-la, bi-bi-ral-la-la-la, bi-de-ral-la-la ra-bi-bi-
 ral-la-ra-la, bi-tra-de-ra-da-ra-bra.

Hochzeiten viel gesungen,……Wir dürfen annehmen, daß auch alle andern Lieder von der Vogelhochzeit seit ältester zur Befestigung bei Hochzeitsgelagen gesungen wurden. (g)=⑨『グリーン民謡集』(《Grün, S. 3》)。⑩『ヴァッケルナーゲル, 読本』(《Wackelnagel, Befeb., II, Nr. 9》)。

- 74) [E・B 167] 〈Gestern Abend gieng ich aus,〉『エルク・ペーメ』第1巻523頁。出典
 ①『エルク』Nr. 57。②『ホフマン, シュレジエン民謡集』(《Hoffmann, Nr. 45》)。
 ③『エルラッハ民謡集』(《Erlach, 4, 17》)。
 ④『ヴィルトハイム民謡集』(《Wildheim, Lieberb., 8 Aufl., 1837, S. 36》)。
 ⑤『ドイツ歌謡集』(《Deutsche Lieder für Jung und Alt, 1818, S. 23》)。
 ⑥『クレッチマー・ツッカルマリオ民謡集』(《Kr. u. Zucc., I, S. 218》)。
 ⑦『デイトマル, 子供の野原』(《Dittmar, der Kinder Lustfeld, 1827, S. 85》)。
 ⑧『シェーラー, 童謡集』(《Scherer, Kinderl., I, 1873, S. 31》)。
 エルク・ペーメの解説は, »Das Hefenlied überlassen wir gern unsern Kindern zum Scherz. Aber in frühern Zeiten, wo Jagdlust noch allgemeiner und Lebenserheiterung sich mit geringfügigen

Mäßig. Durch ganz Deutschland verbreitet.

1. Ge - stern A - bend gieng ich aus, gieng wol in den Wald hi - naus;
 saß ein Hä - se - lein in dem Strauch, guck mit sei - nen Aug - se - lein raus. Ar - mes Hä - se - lein,
 was du sagst und gang heim - lich zu mir klagst!

Erste Melodie.

Mäßig. Aus dem Hessen-Darmstädtischen und Badiſchen.

(a) Ich ar - mer Hä - se - lein im wei - ten Feld, wie wird mir doch so grau - sam
 nach - ge - stellt! Bei Tag und auch bei Nachte, da thut man nach mir trachten. Man
 tracht mir nach dem Le - ben mein: wie bin ich doch ein ar - mes Hä - se - lein!

Zweite Melodie. Aus Schlesien (Reiße).

Mäßig. Ich ar - mes Wald - hä - se - lein auf frei - em Feld, wie wird mir doch so grau - sam
 nach - ge - stellt! Bei Tag und auch bei Nach - te, Man tracht mir nach dem
 so thut man mir nach - trach - ten. Le - ben mein: wie bin ich doch ein ar - mes Wald - hä - se - lein!

Dingen begnügte, beschäftigte es auch Erwachsene, wie die vielen Dichtungen beweisen; sogar Mönche fanden Gefallen daran. Darum findet es sich schon im 16 Jahrh. lateinisch in einer Papierhandschr. vom Jahr 1575 in der Münchener Bibliothek.◀

[G. B 168] <Einmal als ich ging allein,> 『エルク・ベーム』第1巻525頁。(a)＝出典 ①『エルク』Nr. 57°. Aus Malseld und Malsbach im Odenwald u. aus Bähringen. (b)＝②『エルク』Nr. 57°. ③『角笛』4, 194. (c)＝アルニム (Anim) の蒐集による。④『エルク』Nr. 57°. ⑤『角笛』4, 193.

Mäßig bewegt. Mel. seit 1820 gefannt.

1. Zwischen Berg und tie - sem, tie - sem Thal sa - ßen einst zwei Ha - sen,
 2. fra - ßen ab das gru - ne, gru - ne Gras, fra - ßen ab das gru - ne, gru - ne Gras
 3. bis auf den Ha - sen. tie - sem Thal, grü - ne Gras, grü - ne Gras.

Var. 1820.

1. 2. 3.

[G. B. 170] <Zwischen Berg und tiefem, tiefem Thal saßen einst Hagen,> 『エルク・ベーム』第1巻527頁。『エルク, ゲルマニア』(《Gr̃, Germania, 1868, Nr. 366》)。

- 75) <Es gingen drei Baurn und suchten ein Bärn,> 『エルク・ベーム』第1巻508頁。出典『フォルスター民謡集』(《Förster, II, 1540, Nr. 75》)。



- 76) <Ach Tannebaum, ach Tannebaum, du bist ein edler Zweig!> 『エルク・ベーム』第1巻543頁。(a)＝出典 ①『鉱山の民謡集』(《Bergliederbüchlein, 1740, Nr. 188》)。『エルク・ベーム』に掲載されている歌詞(テキスト) A～D。

A (Text aus dem ①)

1. Ach Tannebaum, ach Tannebaum,
 Du bist ein edler Zweig!
 Du grünest uns den Winter,
 Die liebe Sommerzeit.

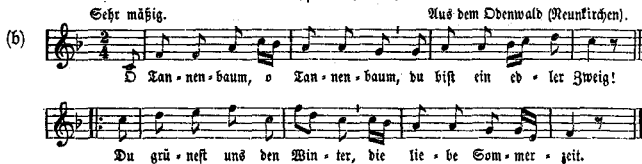
Die älteste Melodie.



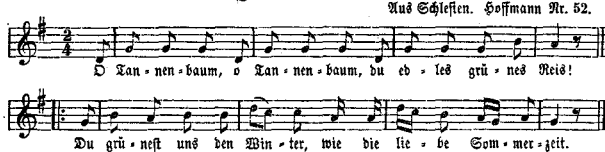
B (Text aus einem geschrieb. Wiederb. des 17 Jahrh.)

1. O Dannenbaum, o Dannenbaum,
 Du bist ein edles Zweid!
 Du grünest wol Sommer und Winter

Erste Melodie.



Zweite Melodie.



Wie auch die Frühlingszeit.

③ (Text aus einem Liede: „Es hing ein Stallknecht seinen Baum“)

1. O Tanne! du bist ein edler Zweig, ::

Du grünest Winter und die liebe Sommerzeit. ::

Aus dem Ruhländchen (1840).

(c)

Ei du ed - ler Tan - nen - kaum, du bist a - ed - ler Zweig! Du
grü - nest ai - dam Win - ter, und ai - der Som - mer - zeit.

④ (Text aus Schlesiſches Gebirgshirtenlied)

1. „O Tannebaum! o Tannebaum!

Du bist ein edler Reiz!

Du grünest in dem Winter,

So wie zur Sommerzeit!—

Sehr mäßig. Aus dem Paderbornschen. 1812.

(d)

1. O Dan - ne - bom, o Dan - ne - bom, du trägt 'ne grö - ßen Aweig, den
Win - ter, den Som - mer, dat doert de le - ve Aib.

(b)=②『エルク』Nr. 155。口承による。Aus dem Odenwald u. Schlesien. ③『ホフマン, シュレジエン民謡集』(『Hoffmann, Schles. Volksl., Nr. 52』)。(c)=④『クレッチマー・ツツカルマリオ』(『Kr. u. Zucc., I, Nr. 139』)。(d)=⑤『ライファークシャト民謡集』(『Reiferscheid, Nr. 24』)。なお、中世末期に由来するこの民謡に関する、エルク・ペーメの解説は、»Ende des 16 Jahrhunderts war das Lied schon gekannt und wie der Lautensatz von 1590 beweist, darin die Mel. schon als Tanz verarbeitet ist. Nicht minder beliebt war es im folgenden Jahrhunderte. In einem Quodlibet von M. Franck, 1615 begegnen wir ihm und seiner alten Melodie, die ich obenan gestellt habe. In einem Wiederquodlibet von 1620, betitelt „Drillenschwärm“

(f. Abdr. im Weimarschen Jahrb. III, S. 131), kommen folgende Zeilen vor:

Du grünest aus den Winter,

Die liebe Sommerzeit.

Fr. v. Sogau in Nr. 2138 seiner Singgedichte, Breslau (o. J. 1654) sagt:

Wenns hoflich wo gieng zu

So klang ein Reutterlied,

Der grüne Tannenbaum,

Und darn der Bindenschmied.

In der pseudonymen und 1673 gedruckten Satire „Reim dich, oder ich treffe dich“ wird S. 42 neben vier andern Liederanfängen auch genannt „Tannenbaum, ach Tannenbaum“.

In dem „Mamobisch technologisch Interim“ sagt Einer S. 143: er sei nicht so alt, er könne noch den alten Hildebrand und Gut Henchen (lies Henchen) über die heide nans reit fingen und nach dem Tannenbaum eine Galgenarh (lies Galliard) springen.

In dem Possenspiel „Der bisterliche Exorcist“, welches der genannten Schrift angehängt ist, fingen frater Johannes und pater Bernhard auf die Weise des Tannenbaumes (S. 29)

Ambo appropinquamus jam

Herr antice zu dir.

sagende, bona dies quam,

mit dir, optamus wir.

„Zu Mildorff ist vordem der Gebrauch gewesen, daß die Herren Studiosi auf öffentlichen Markt und Gassen Tische gesetzt und dabei geschmauset, allwo sich dann auch die vorbegehenden Herrn Professores nicht erwehren können eines mit zu machen, und die alte Stückerhen, als z. B.: O Tannenbaum, o Tannenbaum u. mit anzustimmen.“ (Recueil von allerhand Collectaneis und Historien. 6 Hundert. 1719, S. 15)« また、中世末期に発生した民謡の当然のあり方として、この民謡には、宗教的変形もある。『エルク・ペーメ』によれば、⑥『アウルバッヒャー・中世ドイツカトリック教会歌集』(《E. Murbacher, Anthologie deutscher katholischer Gesänge aus älterer Zeit. Landshut, I, 1830, II, 1833, S. 202》)には、

1. O Tannebaum, o Tannebaum,

Holbeseig ist dein Nam! (hat 45 achtzeil. Strophen)

とある。また ⑦『トープラー民謡集』には、

1. O Tannenbaum, o Tannenbaum,

Du bist ein edles Bwiz;

Du grünest Sommer nud Winter,

Es regni oder schnei.

2. 3. 4. 5. *)

6. O Nachtigall, o Himmelsaal, —(Schluß)

O Kron der Seraphim,

O schöne Stadt Jerusalem,

Wär ich ein Bürger bin!

*) 略

とある。また ⑧『都市と田舎のための民謡集』《Völk. für Stadt und Land, Halle a. S., 1840, Nr. 29》)には、

O Ebernbaum, o Ebernbaum,

Wie grün sind deine Blätter!

Du grünst nicht nur zur Sommerzeit,

Auch wenn es friert und stürmt und schneit.

Der Wetterstürme Trotz und Hohn,

Dann grünen deine Blätter.

O Ebernbaum vom Libanon u. (6 Str.)—

実用的な民謡集出版の要求も高く、それにこたえるものとしては、『地方の民謡とその旋律、挿絵つき』(《Landschaftliche Volkslieder mit Bildern und Weisen》)のシリーズがある。これは第2次大戦前既に40巻出版され、当初の目的どおり、殆ど全ドイツ語圏を包括していた。これは1964年に再刊された。なお、シリーズ再刊前に2巻⁷⁷⁾ほど同種のものが苦勞して出されている。また先にも触れたが、DBAは「音響文庫」(最新のレコード技術を活用する)を設けることを試行してきているが、これは「東部ドイツ民俗学研究所」との協力関係のうちになされている。『口承による古代民謡』(《Alte Lieder aus mündlicher Überlieferung》)⁷⁸⁾は両「音響文庫」の協力の成果であった。

最後に、今後の新しい課題として強調されるべきことは、ドイツ民謡学会における「比較民謡学」(Die vergleichende Volksliedforschung)の重視であろう。バラードのドイツ領域外伝播を研究する過程で、主としてエーリヒ・ゼーマンは「比較民謡学」の確立に貢献した。もっとも、ジョン・マイアーは、何十年も前にこれを予見し、DBAにサブ名称「国際民謡学研究所」(Arbeitsstelle für internationale Volksliedforschung)を与えていたのであるが、「学」(Wissenschaft)としての民謡研究の必然的に到達すべき所であった。旋律研究の領域では、言語の障害も少ないので比較研究は既に進んでおり、「国際民俗音楽会議」(International Folk Music Council)⁷⁹⁾が中心機関として活躍している。であ

とある。

エルク・ベームは、また »Noch heute ist das „Tannenbaumlied“, wie es in folgenden Form*) vorliegt, in ganz Deutschland bekannt und wird von Studenten, Turnern, Soldaten, Handwerksburschen und Männern in betterer Gesellschaft, sogar in einer Umdeutung von Schulfürdern gesungen.« と述べている。

*) 『エルク・ベーム』第1巻548頁。[G・B 176]。ここに掲載されているのは、旧来の古旋律(メロディー)や、各種の変形(ヴァリエーション)が、新しく定着されたものである。それは ⑨『ツアルナック民謡集』(《Zarnack, Volksl., 1820, II, S. 29》)。

77) 即ち、コンラート・シャイアーリンク (Konrad Scheyerling) の『シュペーベントルロのドイツ民謡とその旋律』(《Deutsche Volkslieder aus der Schwäbischen Türkei》)及び『ホーエンローエ地方のドイツ民謡とその旋律』(《Deutsche Volkslieder aus Hohenlohe mit ihren Weisen》)。

78) これは《Deutsche Volkslieder. Eine Dokumentation des Deutschen Musikrates.》の「第1部」として作成された。

79) 1934年にウィーンではじまった「ヨーロッパ民俗舞踏競技会、民俗舞踏祭」(der

るから、*DSM* は歌詞 (テキスト) に関する研究に勢力をさこうとしている。*DSM* の現指導者ロルフ・W・ブレトニヒの提案は、»当面「比較童話学」(*Die vergleichende Märchenforschung*) の成果を模範にして、国際的に拡散している物語歌の一定の型ごとに目録を作成することから始めてはどうか« というのである。スウェーデン・ノルウェー間では、準備は既になされ、この種目録の作成出版も近いといわれる⁸⁰⁾。この「比較民謡学」は当面ヨーロッパ内の諸国間で確立され、しかる後必ず「日本歌謡学会」(*The Association of Japanese Ballads and Songs*) の岸边をあらうことになるろう。

(昭和42年4月7日受理)

europäische Volkstanzkongress und das Volkstanzfest) から、この「国際民俗音楽会議」は発生している。1947年にロンドンで設立され、毎年学会を開催し、機関誌を出版している。

- 80) ジョンソン (Bengt R. Jonsson) がブレトニヒ (*R. W. Brednich*) に報告したと、ブレトニヒは述べている。(註: *J. Blätter für Volkskunde*, 1964)

補註——註25)～註76)に関して『エルク・ペーメ』第1巻「文献目録」(*Quellen Verzeichniß*)より引用)——重複する部分もあるが『人名十民謡集』のうち主要なものは下記民謡集類である。

- ①『ベッケル民謡集』→(*Otto Böckel, Deutsche Volkslieder aus Oberhessen*, 1885)」。②『ペーメ民謡集』→(*Franz, M. Böhme, Mitdeutsche Liederbuch. Volkslieder der Deutschen nach Wort u. Weise aus dem 12-17 Jahrhundert*, 1877)」。③『デイトフルト民謡集』→(*F. Wilhelm von Ditzfurth, Fränkische Volkslieder mit ihren Singweisen*, 1853)」。④『エルラッハ民謡集』→(*F. K. Freiherr von Erlach, Volkslieder der Deutschen*, 5 Bde, 1834-37)」。⑤『フィートラー民謡集』→(*Ed. Fiedler, Volksreime u. Volkslieder aus Anhalt*, 1847)」。⑥『ホフマン民謡集』→(*Hoffmann v. Fallersleben, Schlesische Volkslieder mit Melodien, aus dem Munde des Volks gesammelt*, 1842)」。⑦『フルシカ民謡集』→(*Mois Gruschka u. Wendelin Toischer, Deutsche Volkslieder aus Böhmen*, 1891)」。⑧『クレツチマー・ツツカルマリオ民謡集』→(*Mugst Kreutzschmer u. M. S. v. Zuccalmaglio, Deutsche Volkslieder nach ihren Originalmelodien*, 2 Bde., 1838-40)」。⑨『キューンツェル民謡集』→(*H. Künzel, Geschichte von Hessen, insbesondere des Großherzogthums Hessen u. bei Rhein, in Chroniken u. Geschichtsbildern, in einer Liederschronik aus dem Munde der Dichter, in Mundarten, Sagen u. Volksliedern*, 1856)」。⑩『レヴァルター民謡集』→(*Joh. Bewalter, Deutsche Volkslieder aus Niederhessen aus dem Munde des Volks gesammelt, mit einf. Klavierbegleitung*, 3 Hefte, 1890-92)」。⑪『マイアー民謡集』→(*Ernst Meier, Schwäbische Volkslieder, mit 31 Melodien*, 1855)」。⑫『マイナート民謡集』→(*Pos. Georg Meier, Der Tülgie. Alte teutsche Volkslieder in der Mundart des Ruckländchens in Mähren*, 1817)」。⑬『ミットラー民謡集』→(*F. R. Wittler, Deutsche Volkslieder*, 1855)」。

- ⑭『ミュレンホフ民謡集』→《Karl. Müllenhof, Sagen, Märchen u. Lieder der Herzogthümer Schleswig-Holstein, 1845》。⑮『ミューラー民謡集』→《Alfred Müller, Volkslieder aus dem südf. Erzgebirge, 1883》。⑯『ミュンデル民謡集』→《Curt Mündel, Gifflische Volkslieder, 1883》。⑰『ペーター民謡集』→《M. Peter, Volksstümliches aus Oesterreich-Schlesien, 1865》。⑱『プレーレ民謡集』→《Heinrich Bröhle, Weltliche u. geistl. Volkslieder u. Volkschauspiele, 1855》。⑲『ライファァーシャイト民謡集』→《Alexander Reifferscheid, Westfälische Volkslieder in Wort u. Weise, mit Klavierbegl. u. Lieder vergleichenden Anmerkungen, 1879》。⑳『シェーラー民謡集』→《Georg Scherer, Die schönsten deutschen Volkslieder mit ihren eigenthümlichen Singweisen im vierstimmigen Satz u. zahlreichen Holzschnitten, 1864》。㉑『シュライヒャー民謡集』→《M. Schleicher, Volksstümliches aus Sonneberg im Meinigischen Oberlande, 1853》。㉒『シュロッサール民謡集』→《Anton Schlossar, Deutsche Volkslieder aus Steiermark, 1881》。㉓『シュスター民謡集』→《F. Wilhelm Schuster, Siebenbürgisch-Sächsishe Volkslieder, Sprüch= wörter, Räthsel, 1865》。㉔『シュミッツ民謡集』→《F. G. Schmitz, Sitten und Sagen, Lieder, Sprüchwörter u. Räthsel des Giffler Volkes, nebst einem Idiolikon, 1856, 1858》。㉕『ジムロック民謡集』→《Karl Simrock, Die deutschen Volkslieder, 1851》。㉖『トープラー民謡集』→《Rudwig Tobler, Schweizerische Volkslieder, 2 Bde, 1882-84》。㉗『ウーラント民謡集』→《Rudwig Uhland, Alte hoch- u. niederdeutsche Volkslieder, 1844-1845》。㉘『フィルマール民謡集』→《M. F. C. Wilmar, Handbüchlein für Freunde des Volksliedes, 1867》。㉙『ヴァルター民謡集』→《Wilhelm Walter, Sammlung deutscher Volkslieder, welche in keiner Sammlung zu finden, 1841》。㉚『ツアルナック民謡集』→《August Zarnack, Deutsche Volks= lieder mit Volksweisen, 1818-1820》。㉛『ツールミュレン民謡集』→《Hans Zurmühlen, Des Dürkner Fiedlers Liederbuch, 1875》。㉜『コーゼマーカー民謡集』→《E. de Coussemaker, Chants populaires des Flamands de France, 1848》。㉝『ヴィレムス民謡集』→《J. F. Willems, Oude en nieuwe Liedjes, 1864》。㉞『ヘルダー民謡集』→《F. G. v. Herder, Volkslieder, I, 1778, II, 1779; Stimmen der Völker in Liedern, 1807》。㉟『ビュツシグ・ハーゲン民謡集』→《Büchling u. v. d. Hagen, Sammlung deutscher Volkslieder, mit einem Anhange flamländischer u. französischer. Mit separatem Melodienheft, 1807》。㊱『クルツ民謡集』→《Heinr. Kurz, Aeltere Dichter, Schlacht- u. Volkslieder der Schweizer. In einer Auswahl., 1860》。㊲『フルギ民謡集』→《M. Mugi, Die Volkslieder im Engadin, 1873》。㊳『シャァーデ民謡集』→《Oskar Schade, Volkslieder aus Thüringen. Gesammelt u. mitgeth. in Waimarer Jahrb. III, 1855》。㊴『シュテーパー民謡集』→《August Stöber, Gifflisches Volksbüchlein, 1842》。㊵『ズイルヒャー民謡集』→《Friedrich Sticher, Deutsche Volkslieder für 4 Männerstimmen gesetzt. 12 Hefte, 1825-1840》。㊶『ヴェツケルリーン民謡集』→《F. W. Beckerlin, chansons populaires de l'Alsace. Giffler Volkslieder deutscher Sprache, neben franz. Uebersetzung, Mit Melodien, 2 Bde, 1883》。